二-34

応用心理学論文集

[第1集]

[10]11-13回 [14回]

日本応用心理学会大会

研　究　発　表　報　告

大体育大学図書館蔵書
昭 61. 4. 28
133826

日本応用心理学会

140.4
N77
V.11=13

目次

はしがき……一
日本応用心理学大会
第十一回研究発表報告……三
第十二回研究発表報告……三八
第十三回研究発表報告……六七
補遺……九六
日本応用心理学会・関西心理学会
連合大会研究発表報告……一〇三

はしがき

◆この研究抄録は、日本応用心理学会第十回、十一回、十二回、十三回大会で発表されたものである。その期日および会場はつぎのとおりである。

第十回——昭和二十五年十一月　学習院大学
第十一回——昭和二十六年七月　千葉大学
第十二回——昭和二十六年十一月　東京学芸大学
第十三回——昭和二十七年七月　横浜国立大学

◆従来日本応用心理学大会での研究発表報告は、教育心理研究、人間科学などに掲載されてきたが、戦争中あるいは戦後の出版事情のため、永い間中絶されていた。第十回大会の総会にはかり、その後のものをまとめて出版することとなり、委員をあげて準備をすすめ、昭和二十七年十一月、とりあえず第一回——第十三回までの「研究発表項目一覧」を刊行した。

◆総会の都度、会員によびかけ、抄録の提出を依頼したが、全部をそろえることはできなかった。またなかには、制限枚数をはるかに超えているため、やむをえず削除しなければならなかったものもある。編集は、大会ごとに、通し番号をつけ、発表順に配列し、内容による分類は行っていない。

◆この報告ができ上るまでに、東京十仁病院長梅沢文雄氏からは刊行費にあてるための多額の寄附をいただき、出版については中山書店の好意を、また校正については川村短大助教授島田一男氏他の奉仕的な努力をいただいた。記して心からの謝意を表する次第である。

なお今後は、一カ年ずつをまとめて刊行する予定である。

昭和二十八年七月

編集委員　小保内虎夫
　　鈴木清
　　松村康平

第十三回大会　昭和二十七年七月

各種客観テストの比較研究
目標把捉性の相違について

金井達蔵

目的　各種の客観テストはその用具の形式の相違によって、困難度の差異がある。これを語いテストによって検討を加えようとするものである。今その成績は、被験者の能力、問題の配列構成、問題の難易、テストの形成ならびにこれらから生ずる誤差の要因によって定まると仮定し、変量分析法の一つであるグレコ・ラテン方格法により要因を検定しようとする。

方法　被験者：中学一年二〇三名、田中A式による知能偏差値に基ずいて、等質五群をつくる。テスト問題の内容：小四年～中一年の四種教科書より共通語い六〇をえらび、四回の予備テストにより五〇語（通過率三〇～八〇％）を選定、困難度の等しい五の系列をつくる。（それぞれを、ギリシャ文字で示す）問題の形式：再生法と再認法、後者はすべて四肢選択法、また再認法は、文脈、同意語、反意語、および説明の形式からなっている（それぞれをラテン文字で示す）。問題の配列構成：均一性を保つためにグレコ・ラテン方格により配置した。即ち、同じ行、同じ列には必ず同じラテン文字、ギリシャ文字が一回現われ、しかも一回だけしか現れない。また両文字の組合も一回、しかも一回だけしか現われない。

結果　行、列変動からはそれぞれ被験者の能力ならびに問題の配列構成がわかる。さらに補助表を用いることにより、ギリシャ文字、すなわち問題内容差による変動と、ラテン文字すなわちテスト形式差による変動を算出した。それぞれの分散比に基ずいてF検定を行うと五％の危険率においては、いずれの変動も有意なものとは言えない。一〇％の有意水準を考えると、問題形式差による変動のみが、有意なものとなる。一〇％の有意水準においては、どの形式間に有意の差を認めるべきか。これがため、問題の形式差変動だけをさらに変量分析をこころみた。再生法と再認法の同意語、反意語の群は文脈、説明の群と二％の危険率で帰無仮説を棄却することができるから、両者間には明瞭に差異があると言える。然し文脈と説明との二者間ならびに、再生法と同意語反意語の三者間には、いずれも二〇％の危険率ですら、帰無仮説を棄却することはできない。

結論　①、一般に語いテストでは、その形式の相違から生ずる差は大きくはないが、みられる。②、再生法と同意語および反意語による再認法は明かに、文脈および説明による再認法の形式より困難である。③、文脈による法と説明による法との間には差異は認めにくい。④、十分配慮して作製した同意語、反意語による多肢選択と単純再生法との三者間には有意の差は見出しにくい。⑤、少くとも、語いテストの困難度は再生法ならびに同意語、反意語による再認法と文脈あるいは説明による再認法との二つに類別できるから、同じ語いテストにても、その目標の把捉性に差異があると考えられよう。

反省　グレコ・ラテン方格法の実測値は正規型分布であることを前提とするが、その検定を行ってない。

成功・失敗の影響に関する研究

横山雅臣
横浜国立大学

小学校六年児童一一四名を被験者として、精神作業に及ぼす成功、失敗の影響を測定し、併せて実験場面に関する分析的考察を行った。

方法　実験段階を三つに分け、第一、第三段階において、同種、同程度の異同弁別作業を二分間行わせる。第二段階においては、Jig-Sau-Puzzle を用い、被験児童を成功、失敗の二群に分ける。前者には解決可能は、後者には最初の一題（この問題への Motivation を与えるため、最初の一題は解決可能とした）以外解決不能の Puzzle を三題ずつ与え、一定時間後（一〇分二秒）中止する。この時、成功グループ全員は解決し終っている。

結果　作業速度および正確度の二点からみると、

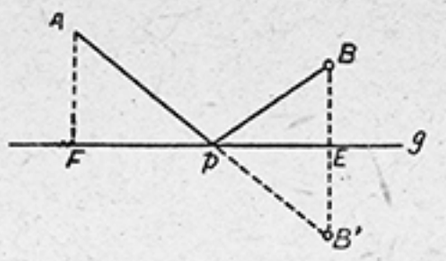
1、成功グループにおいては、作業量の増大がみられた。
2、また、正確度においても、わずかではあるが減少をみた。これは、殊に競争場面であるとか、賞讃を与えられた場合に顕著である。
3、失敗グループにおいては、作業量の減退をみたといえる。
4、正確度の増減はまちまちである。
5、それ故、失敗グループにおいては、作業能力の効率が低下したといいうる。
6、競争は、作業量、正確度ともに、成功グループには（一）の、失敗グループには（＋）の、要因となった。
7、作業量に対して、賞讃は無効果となり、叱責は（＋）の影響を与えた。
8、正確度に対しては、賞讃、叱責ともに（＋）の影響を与えた。
9、失敗グループに競争、叱責の両要因が加わった時には明らかに正確度の減退をみた。

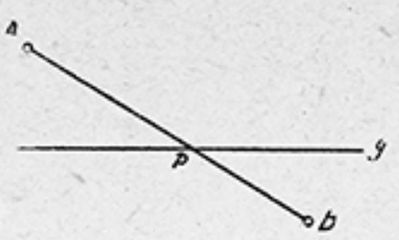
幾何学的思考過程の研究（I）

――思考過程の分析――

小保内虎夫
荻野勝之助

元来幾何学的証明は、結局解決者が適当なる公理や定理に想到することによって行われるのであるが、公理や定理は、彼等においては、個別的、直観的な模型によって理解されている場合が多い。しかるにかかる公理や定理を多くの例題に適用するためには、それ等はそういう個別的、直観的な模型の拘束から引き離されることを必要とするのである。





「直線gの両側にある点A、Bを結ぶ線分は、必ずgを通り、しかしてそれがAよりBに至る最短距離である」という公理は、上図のようにて直観化されるが、さらに、例題「直線gの同側にある二点から一旦gに触れて両者を結ぶ、最短距離はgにおいて等しい角をなす二つの直線である」。という事になると公理において強調されているのは、A、Bを結ぶ直線であるのに、例題においては、この直線は極めて末稍的位置に隠されている。したがって、この例題に公理を応用するためには、すくなくとも、それに気付くという段階においては、公理は、その直観的な個別性から引き離されて、その抽象的な意義において把握されることが必要である。なお、強調される部分の相異によって、公理の再認が困難になることは Gottschaldt が知覚領域において明らかにした事実と極めて類似している。かかる見地から上の例題について実験を試みた結果は、

試みられた過程	人数
直角三角形EBPと直角三角形AFPとの合同	六八
Pに於てgに垂線を立てる	五九
ABを結びpよりABに垂線を下す	七
g上に他の点を色々求め比較する	○
Bの対称点B_1を求める	○

上の結果においても解る通り、直線gの上側にのみ固執せる者は解答へ迄至らず試行錯誤をくり返す。しかして、同じ試行錯誤を行う中にも問題の Factor（この問題においては、最短距離と対称という二つの Factor によって解答が導き出される）に向かっていた者は解決へ導かれる機会が非常に多くなっている。すなわちこの問題においては最短距離という Factor と対称という Factor が如何に結びつけられるか、ここに問題のカギがある。

親と子供の関係の心理

（子供から見た親）

児玉省
松山淑子

この研究は親から見た子供の研究のその反対の面を取上げた物であって、この研究に於ては親の子供に対する理解、親の躾方に対する評価、男女の友達間の交際に対する親の態度、勉強や遊びに対する親の態度、父母に於ける好きな点と嫌いな点等の項目を取上げた。前の研究と同様品等法の選択反応と、子供自体の自由表現の反応を求める物と二つを併用した。

東京地方、福岡、群馬、山梨、名古屋等の小学校、中学校、高校の生徒約千六百名を調査の対象として取上げた。親の理解に就ては小学校から高校に至る迄大体青少年は親から良くわかってもらっていると思っている。躾の問題に就ては五段階の選択項目中「それ程厳しくもないし、甘くもない」という普通の所が全学年を通じて一番多い。しかしそれに続いて多いのは「大体厳しい方である」という段階であってこの二つの項目で殆ど大部分を占めている。男女友人間の交際に就ては、「少しは何かいっても特別にいう事はない」という項目が最大反応を示し、それに続いて「何もいいません。唯、放任している」という項目がこれに次いでいる。そういう意味からいって反応は上の方に傾っていて躾の場合のやかましい方に傾るのと対蹠的になっている。又、勉強や遊びに就いての親の態度に就いては「多少やかましい方」というのが一番多くその次が「中位の方」でこの二つで大方を占めている。この結果によって見ると子供達は良く理解してもらっていると思っている様であって、同時に親の躾は勉強と遊びに関する点をも含めて可成り厳しいと考えている様である。しかも子供は理解してもらっていると考えている以上躾の厳しさを大体容認しているという事がいえる。子供から見た親の好きな点に就いてはその反応数の順に並べて見ると「理解がある」が第一位「世話をしてくれる」「教育に熱心」が第二位「小遣いをくれる」が第三位「明朗」「やさしい」等が四、五位を占めている。「世話をしてくれる」と「教育に熱心」に対する反応は、「世話をしてくれる」は中学以後増加して来る傾向があるのに対して「教育に熱心」という項目は小学校から中学迄が多く、以後急激に減少している。「小遣をくれる」はこれも中学校迄が多いのと、男の子供に於て女の場合より多い様である。「明朗」と「やさしい」は高校期になりにわかに増加する。以下「家庭的」「正直」「厳格」「実行力あり」「趣味が豊か」「煙草酒を飲まぬ」「几帳面」「賢明」等という項目も何れも高校期になって多少目について来る項目である。即ちこ

れらの点は高校期になって始めて青少年が高く評価し始める項目の様である。親の嫌な点は好きな点の反対であると見て良い所もあるが、違った言葉を持って表現している場合がある。「頑固である」「しつこい」等はそれである。又、「感情的」なる項目は全年齢を通じて最も反応数が多い。その他「人が良過る」「几帳面」「厳格」「容姿態度が悪い」「教養がない」「生活が不規則」等という項目が増している。

集団の成層構造に関する一考察

小林さえ子

独裁的指導従属形態を、民主的指導従属形態に再構造化せしめた実験、（既報、集団の指導従属構造に関する一考察、第二・三報、その他目下実験中のもの。）の帰結に基いて、独裁的指導者を、民主的指導者の社会的行動に変容させる若干の技術をのべる。

それらによれば、集団成層化の形態を規定する要因には次の如きものが予想される。

（a）当該集団事態（課題及び問題解決の場面）（b）当該課題解決に対する成員の能力水準。（c）集団成員の性格。（d）集団成員のより大きい社会的場の成層における地位の、当該集団事態への移調的効果の度。（e）集団成員の一体性の度。（f）成員のイデオロジー。

而して、それらは直接的には、成員相互認識の現象面に於て働き、成層は成立する。

独裁的指導者は、集団の中心領域を独占し、その領域拡大を意図するものであり、民主的指導者は、中心領域にはあるが、それを独占することはなく、他の成員にも時にそこに進出することを許すと考えられる。

以上、独裁的行動を、民主的指導者の行動に、変容せしめる手段として、次の事柄をあげる。

(1)、認識構造に変容を与える。当該独裁者にとり、権威あるものから、民主的行動の、理想目標をときかせる。(2)、民主的指導者の指導法を現実に観察せしめる。(3)、独裁者に、他の独裁者の典型的指導法を、現実に観察せしめ、民主的指導法と比較させる。(4)、民主的指導者と、独裁的指導者を同時に同一集団指導に参加させる。（実験の結果によれば、当該集団成員等は多く、この際には、民主的指導者に従属し、独裁者を孤立（坐折）させる。この事実を、独裁者は経験し認識構造を変容せしめることが多い。）以上主に、（f）の要因から。(5)、もし、独裁的指導者が、教室における、最優秀児であり、課題解決能力水準の差の著しさの相互認識により、独裁者となる場合には、教師は、被指導者の側の力に加工し（例、彼等が成功した場合には、賞讃する等。）、両者の差をより小に相互認識させるように働きかける。主に（b）（d）の要因に関係。(6)、独裁者の中には、時にサディズム的傾向のある者がある。かかる場合にはそのコムプレックスを除くようにする。主に（c）の要因から。

家庭における児童—成人の関係について

辻　正　三

本報は、我々が昨年来試みている〃家族序列法〃（仮称）による児童を通してみた家庭における人間関係の研究の一部である。今回は、全家族序列における父母、祖父母の位置を中心として考察した二、三の結果について報告する。

先ず、全家族序列における父母の上位序列率（全家族序列を折半して上半にランクされているか下半にランクされているか）を、男女別学年別に見ると、(1)概観して上位序列率は七七～九九％で圧倒的に上位に序列づけられていること、(2)男女児ともに三学年以後母の方が上位序列率が大となること、(3)母親の上位序列率の遂学年的傾向は男女児が極めてよく一致し、学年の進むに従つて増大すること、等が気付かれる。又、父母の上位序列率を家族成員数五名以下の者と六名以上の者に群別して比較すると、何れも明らかに上位に序列づけられる事例の方が多いが、男女児とも家族成員数の多い群の方がその傾向が著しい。

次に、祖父と祖母の全家族成員序列における位置を見ると、祖父祖母ともに下手に序列づけられる場合が多くなっているが、その傾向は、祖母よりは祖父、女児よりは男児、家族成員多き場合より少き場合において著しい。

最後に、父母の相対的な優位序列率が、祖父母の存否によって左右されるかどうかを見るに、〃祖父のみ〃又は〃祖父母とも〃に同棲する場合は、事例数少く何ともいえないが、〃祖母のみ〃同棲する場合は、祖父母のいない〃父母のみの場合に比し〃男女児とも相対的に父の優位序列率が大となる傾向がうかがわれる（ただし五％の水準では有意とはいえない）。しかるに、更に同胞数の多少（被験児童を除き三名以下と四名以上）という条件を導入して見ると、同胞数少き場合明らかに祖母同棲群において父の優位序列率が大となっている（五％の水準で有意）。そして同胞数多き場合は、むしろ逆に祖母同棲群において母の優位序列率が相対的に大となる傾向がうかがわれる。何故にこのような結果がえられたかについての心理学的条件の解明は、目下のところこれをなしえないが、家庭における全成員間の力動的な関係がここに反映しているとみられないであろうか。一つの課題として今後検討してみたいと考える。

家庭に於ける同胞関係の一分析（続報）

中村陽吉

この報告は今年度の日本心理学会大会に於ての報告の続報であり、手続きは全く同様である。前回の報告に於ては各学童の近接同胞に対する好意評定の結果を、本人の性別、学年別、近接同胞の出生順位別、及び同胞総数別に近接同胞の性別での相違の観点から見た。

今回は先ず各学童の近接同胞に対する評定の結果を、本人の性別、学年別及び同胞数別に近接同胞の出生順位別での相違の観点から見ると、評定上、下群の出現率は何れの条件下に於ても多少下群に多い傾向ではあるが、概ね五〇％ずつに近く、特に顕著な傾向は見出せない。

次には本人の性別、学年別に同胞数別での評定変化では低学年男児、高学年男児及び低学年女児に於ては何れも同胞数別での評定に顕著な差を示さず、稍々下群に多くなっている。が高学年女児のみは同胞数多き群は概ね上、下群の出現率が五〇％に近いに反して、同胞数少き群では基しく下群が多く、傾向に差がある（P＜0.05）

次には考察の次元を更に細分し、本人の性別、学年別及び近接同胞の出生順位別に、近接同胞の性別による評定変化を見ると、ここで顕著な傾向差を示しているものは、(1)高学年男児の近接同胞である兄に対する時と姉に対する時の評定は兄は上群に多く、姉は下群に多くなり傾向に差があると云える（P＜0.01）又同じく高学年男児の近接同胞である弟と妹とに対する評定に於ても、弟では上、下群が略均等に出現するに反して、妹では圧倒的に下群が多く、弟に対する場合と妹に対する場合で傾向に差があると云える。

かくして前回の報告及び今回の結果よりして、最も顕著な傾向は高学年男児の近接同胞たる兄又は弟に対する評定と姉又は妹に対する評定に於て傾向が著しく異るという点である。

ところで同じ近接同胞でも本人との年令差の如何によってその評定傾向が異る可能性も考えられるため、特に高学年男児の姉及び妹に対する評定を例にとって当該近接同胞と本人との年令差の効果を見ると、妹の場合は年令差大なる場合下群の評定率が少である傾向を示すに反して、姉の場合は年令差大なる場合に下群の評定率が大である。

今後更にかかる調査による同胞関係の分析を続行すると同時に実験的研究を併用する事によって同胞関係、特に近接同胞と本人との機能的関係を明かにしたい。前報及び本報はこの目的に対する出発的段階である。

向性と学習の関係について

磯貝信太郎

一、目的

学習はいろいろの条件によって行われるのであるが、殊に主体的条件としての知能と深い関係のあることは申す迄でもないことである。然し学習は単に切り離された知能だけの問題ではなく、パーソナリティ全体の問題ではないかと考えられるのであるが、こゝでは向性と学習との関係がどうであるかを見ようとしたのである。

二、方法

(1)、実験の方法　知能検査と向性検査を実施して、殆んど同じ知能の児童を外向性と内向性の二つのグループに分けて実験を行った。

知能検査は新制田中B式知能検査用紙を用い、向性検査は榊原氏の乙式向性検査用紙を用いた。実験は山越の選別力検査器を用いて個別的にカード分類を一〇回やらせ、その各回の時間と誤り数を見た。

(2)、被験者　被験者は小学校四年生で外向性グループ一〇人、内向性グループ一〇人計二〇人である。

(3)、実験時期　昭和二十七年二月一四日――同二九日午前九時――三時。

三、結果の考察

(1)、カード分類に於ける外向性グループと内向性グループの時間的差異　両グループの一〇回の時間の平均は外向性グループ七二・二四秒内向性グループ八八・四八秒で外向性グループが二六・二四秒速いことになっている。

(2)、カード分類に於ける外向性グループと内向性グループの誤り数の差違　両グループの誤り数を見るとその合計は外向性グループ一四八、内向性グループ九七で、そのパーセンテージは六〇・五％に対し三九・五％である。

(3)、差の検定、この結果を X^2 法によって検定して見ると、両グループの時間には〇・一％の危険率で、又誤り数には五％の危険率で有意の差が認められる。

(4)、知能と時間及び向性と時間との相関　知能と時間との相関係数 $\gamma=0.553$、向性と時間との相関係数 $\gamma=0.46$ である。この相関係数をTテストによって検定すると、知能と時間は二％以下、向性と時間は五％以下の危険率で相関があると云える。

四、結語

以上の結果から向性と学習には関係のあることが認められる。

就学児の教育的知能的レディネスの環境的相異について

湯本信夫

(1)、研究動機

知能の発達の環境的相異の原因は何か

たとえばA地区（文京、世田ヶ谷区）とB地区（小金井町、拝島、長野県伊那町）湯本著A式三〇分間簡便団

体知能検査では一一〇：一〇二（I・Q）昭和二三～二四年にわたる小四～中三迄の研究。

就学前にどのような知的発達上の相異が見られるか。たとえば、教育的要因と知能的要因との両者の相異はどうか。

(2)、就学前の児童の教育的、知能的要因レディイネスの相異について

A地区

a人　数　一八九人　一八一人（男女合わせて）二七年入学児

世田谷保育園　五八人　小金井保育園　五〇人
高徳寺　〃　三二人　拝　島　〃　四五人
代田幼稚園　四六人　小金井幼稚園　四五人
本　郷　〃　五三人　伊那町　〃　四一人

B地区

b、テスト時期　二六年六月一五日――二六年八月一五日（二ヵ月間）

c、テスト法　私が一人ずつ面接テストしたもの一人三〇分間～四〇分間

d、用いたテスト（プリント参照）

総合点九三点（A）八三点（B）（・三〇点）

e、教育的要因と知能的要因の相異

	A地区	B地区
(1)前半	93 : 75	(1)後半 88 : 79
(3)	88 : 65	(5) 4 : 3
(8)	27 : 15	(11) 51 : 35
(10)	33 : 10	(12) 96 : 84
	67 : 49	70 : 62

(3)、結論　以上の結果を検討してみると、就学児のレディイネスの教育的面と知能的面に於いて、A地区とB地区との間に、相当の相異が見られ、前者と後者とを比較してみると、前者の方が後者よりも相当大きい相異が見られるのである。

この研究の場合、レディイネスの教育的面と知能的面とを分けて取上げてみたが、それはこの就学児の年令から見ての区分であつて、筆者が分けたような見方は妥当的であるかどうかは問題であって今後検討を必要とするものである。尚テストに用いた全問題の構成にも疑念があると思うが、これは就学児の入学後に於ける学習活動を前提として作製したものである。

ともかく、この研究動機の学童の環境的知能発達の相異の原因が、このような就学時のレディイネスの相異に一因があることは興味のあることであって、今後の研究をその究明に向けたいと思う。

国語読解力の各教科学習に及ぼす影響

石黒彰二

一、問題　国語読解力は広義には各専門領域に属する国語の文章をも理解し得る能力を包含すると言えようが、こゝでは狭義に解して、一般的な国語の文章の読解をなし得る能力として限定し、各専門領域に関する読解力は、これとの密接な関係は認めるが、一応区別して考える。このような一般的読解力の養成は国語科の主要な任務であるが、他の教科の学習においても、この読解力の有無が学習の成否に重要な関係をもつと考えられるので軽視することが出来ない。

そこでわたくしは、(1)国語読解力は各教科の学習成績といかなる関係にあるか。(2)国語（一般的）読解力の向上に役立つか。(3)一般的読解力と専門的読解力とはいかなる関係にあるか。という三つの問題を提起し、いさゝか解明したい。

二、予備調査　(1)目的―国語科読解成績（理解しながら早く読む能力）と他の教科の学習成績との相関を求め、比較検討する。(2)方法―被験者は中学一年八四名、期日は昭和二六年三月。学業成績と教研式国語標準テストを用う。(3)結果―国語成績との相関の高いのは社会（知識と技能）、理科（技能）、英語で、図工（理解）は最も低い。数学と国語との相関は、社会と国語との相関より低く差は有意である。

三、実験(1)　(1)目的と方法―国語読解力の向上は他教科学習成績の向上に役立つか、特に国語の単元学習法は、密接な相関をもつ社会科学力の向上に影響するか、を検討する。統整群法により、単元学習法と従来の指導法と比較する。被験者は中学二年、八四名。学業・知能・向性・家庭環境につきほゞ同等な二学級を編成（同一母集団に属する）。指導教官は同一人。指導時間数もほとんど同じ、期間は一年間。

(2)実験の前後に実施した教研式標準テスト（国語・社会・数学・理科・英語）、大伴氏読書テスト（読字力・字句解釈力・大意把握力）、及び社会科読字力、同字句解釈力テスト・略式客観テスト、信頼度係数は前者78、後者77）の結果を要約すると次の通りである。(イ)総合的な国語学力は、従来の学習法と単元学習法との間に有意な差を認め得ない。しかし字句解釈力、大意把握力では単元学習法が有意な差をもつてまさる。(ロ)社会・理科・英語は国語の単元学習組がやゝ劣り、数学・社会科読字力・同字句解釈力はやゝまさるが、いずれも有意でない。すなわち、一年間の学習による国語読解力の向上における多少の差は、他教科の成績の向上にそれほど敏感には影響しないと考えられる。

四、実験(2)　(1)目的と方法―社会科成績における一般的読解力と専門的読解力の要因の強さを比較検討する。被験者は中学二年、八四名。昭和二七年三月実施。

(2)結果―(イ)社会科（知識）成績に対する各読字力の相関は、一般と専門との間に有意差を認めないが、字句解釈力との相関では専門の方が一層高い（有意）。(ロ)社会科標準テストに対する両者の相関は、専門的読字力及び字句解釈力の方が、一般的のそれより高くその差は有意である。

註、この研究は昭和二十六年度、文部省科学研究助成金によるものである。

乳幼児の心理（第七報）
——人格形式と音見態度の関係——

平井　信義

乳幼児期に於けるPersonalityの形成が、いかなるメカニズムで行われ、それが後の時期といかなる連関を持ち、いかなる現れ方をするかは、Personality理解の大切な方法であると思う。

従来問題とされていた授乳・自己調節授乳・離乳・排尿便のしつけ及びそれらとくせの発生などについて検討したが、之らはPersonalityに影響する部分は非常に少い。

乳児期に於ける個人差を、食慾・偏食・睡眠・啼泣・排尿便など乳児期の主な生活について調査すると、可成り著しい特徴を認めることが出来る。

そこで問題は、そうした個人的特徴を、母親がどう扱うかの問題から、先づ母親の向性検査を行つたが判然としていない。同時に「不安場面」について質問紙法で調査してみると、対照に比して遙かに不安が強い。その条件として、高年で初めて子供を持った場合とか一人っ子——かけがえのない子——である場合とか、祖母の溺愛とか、夫婦間の不調和が挙げられるが、高年夫婦の場合にも、子供に問題の起きない場合が二一・三%に認められる。その条件として子供の個性が問題を持ち難い場合、母親がのんきである場合、よい指導者と得ている場合などがある。

泣き易い子供にも、初めから泣くことの多い子供の場合と、家人の扱いが子供に応ずることが多い場合とがある。その組合せが極端に於て行われると、大きな症状を持つことが考えられる。

神経症的傾向を持っている二四名の二～七才の幼児二四名について、乳児期前半の歴史を見ると、泣き易かつた子供が八一・三%（対照二六・五%）に及んでいる。

小児科医としては、以上の如きPersonalityと関係の深い次の相談を日々受けているが、個人差に基いて、この様な子供が、この様な環境に育っている時には、この様な指導法が必要であるというPattern を見出し、よいPersonalityの形成を目指していく必要に迫られている。目下Follow のCasesにより、更にそれを確かめる努力を行っている。

表 I

		再生法(1) Vp.29名		再生法(2) Vp.21名		再認法 Vp.25名	
		人 %		人 %		人 %	
太陽ノ位置	正常	7(24.1)		10(47.6)		7(63.6)	
	鏡映化	9(31.0)	21(68.9)	8(38.0)	11(52.2)	4(36.3)	4(36.3)
	中心化	11(37.9)		8(14.2)		0	
太陽ノ形	正常	3(10.3)		—		9(69.2)	
	均衡化	20(68.9)		—		4(30.7)	
太陽ト光線トノ間隔	正常	4(13.7)		—		7(53.8)	
	接触	11(36.5)	19(66.5)	—		0	6(46.1)
	短縮	8(31.0)		—		6(46.1)	
雲ノ数	正常	3(10.3)		3(14.2)		10(76.9)	
	脱落 2	8(27.5)		8(38.0)		2(15.3)	
	脱落 1	4(13.6)	22(75.5)	4(19.0)	15(71.2)	0	3(22.9)
	脱落 0	10(34.4)		3(14.2)		1(7.6)	
	増加	4(13.3)		2(9.5)		0	
下ノ線	アリ	1(3.4)		—		6(46.1)	
	脱落	28(96.5)		—		7(53.8)	
雲ノ向方	正常	—		7(33.3)		—	
	反対(鏡映化)	—		10(47.6)		—	
文字ノ大キサ	正常	—		—		4(30.7)	
	縮少	—		—		5(38.4)	
	拡大	—		—		4(30.7)	
雲ノ大キサ	正常	—		—		8(61.5)	
	縮少	—		—		4(30.7)	
	拡大	—		—		1(7.6)	
箱ノ形	正常	—		—		4(30.7)	
	均衡化	—		—		9(69.2)	

註　○正　常＝Vpノ判断が実物通リダツタトイウ意味
○鏡映化＝太陽ノ位置ナラバ実際ト反対ニ「右」ト答エタモノ。「左上」｜右上ナドモ含メル。雲ノ向キナラバ実際ト反対ニ「右向キ」ト答エタモノ。

具体的なものゝ記憶について

須藤　泰男

目的：具体的場面に於けるものゝ記憶が如何に変容するかについて調べる。その為の一材料として、煙草「光」の図案についての記憶を調査する。

方法：(1)再生法（紙に描せる）。(2)再生法（口頭でいわせる）。(3)再認法（実物等大の図を見せ、各部分について実際と異ると思う点あらば、いわせる）被験者総計六三名（九才～六六才）

○中心化＝太陽ガ箱ノ中央、中央下ナドニ定位サレルコト。
○均衡化＝太陽ノ形ナラバ¼円、半円、円ニナル傾向。箱ノ形ナラバ幾分正方形ニ近ヅク傾向。
○太陽ノ位置ノ再認ニ際シテハ、呈示サレタ位置ニ影響サレルコトガワカツタノデ実際通リノ図トリノウラ返シノ図ヲ同時ニ呈示シテ別断ヲ求メタ。之ノミニ25名中13名ノ Vp ヲ使用。

表 Ⅱ

			再生	再認	平均		
			%	%	%	%	%
均衡化	形	太陽	68.8 (10.3)	30.7 (69.2)	50.6 (39.7)	59.9 (35.2)	
		箱	—	69.2 (30.7)	69.2 (30.7)		
水準化	位置	鏡映化 太陽	34.5 (35.8)	36.3 (63.3)	35.4 (49.7)	39.1 (49.1)	32.5 (42.4)
		鏡映化 雲	47.6 (33.3)	36.3 (63.6)	42.9 (48.4)		
		中心化…太陽	26.0 (35.9)	—	26.0 (35.8)		
単純化	縮少	太陽ト光線トノ距リ	66.5 (13.7)	46.1 (53.8)	55.9 (33.7)	41.6 (41.9)	
		文字	—	38.4 (30.7)	38.4 (30.7)		
		雲	—	30.7 (61.5)	30.7 (61.5)		
	脱落	雲	75.8 (10.3)	22.9 (76.9)	49.3 (43.6)	62.2 (34.1)	
		下ノ線	96.5 (3.4)	53.8 (46.1)	75.1 (24.7)		
強調化	拡大	雲	—	1.6 (61.5)	7.6 (61.5)	19.1 (46.1)	
		文字	—	30.7 (30.7)	30.7 (30.7)		
	増加	雲	11.2 (12.2)	0 (76.7)	5.6 (44.5)		

註　カッコ内の数字は「正常」の%

結果：表Ⅰに示す如し。こゝに得られた記憶の変容はすべて Wulf の所謂構造的変化（水準化）と強調化とに属すると認められる。之らの要因に従って結果を整理すれば表Ⅱの如し。よい形及び単純化への傾向顕著なるに対し強調化への傾向は僅か。即ち平均すれば約四〇%（再認法）～六〇%（再生法（の人が何らか水準化への変化を、一〇%（再認）～一一%（再生）が強調化への変化を示す。再認法の結果は再生法に比し変容の度が少いが（有意の差）、それにしても予想以上の変容が見られた。喫煙家かどうかということは、図を描せる場合（再生法(1)）には結果に有意の差をもたらしたがそれ以外の場合は差がなかった。。

ねずみの動機づけの差異による保持度

森下健一郎

目的　動機づけの差による学習速度の遅速とその保持度を見ようとする。

装置　Elliott の考案を基礎にした 6 unit の迷路を用う。

方法　食餌時間を12時間毎に、24時間毎に、36時間毎にと三種に区別して動機づけの差をつける。Massed Practice の方法によつてこの三つの群に対して迷路を走らせその試行数と誤反応数を比較して検討する。被験動物は各〻七匹。

結果　各個体の試行数と誤反応数は次の通り。

	誤反応数 12h group	24h group	36h group	試行数 12h group	24h group	36h group
	58	30	28	6.5	7.0	3.5
	42	65	18	8.5	7.5	3.5
	70	21	22	6.5	5.0	5.0
	44	33	8	6.5	8.5	4.0
	65	63	21	7.5	7.0	5.0
	102	31	35	7.5	4.5	5.5
	75	27	20	7.0	5.0	3.0
計	456	270	157	52.0	44.5	29.5

この結果に対して分散分析法を施すと試行数の F_0 の値は、12.1 となり5 % の sig. に対するFは 3.55 であるから十分有意義である。誤反応の F_0 の値は12.7 となりこれも同様に有意義な差と認められる。更にtテ

Criterion に達するまでのtrials平均

Group	匹　数	平　均
12	1	5
24	6	4.3
36	7	2.3

各個体の trials の数

No	12hour	24hour	36hour
1	—	4	2
2	—	5	2.5
3	—	6	2.5
4	—	4	2
5	5	3.5	2
6	—	3.5	3.5
7	—	—	1.6
		6)26 / 4.3	7)16 / 2.3

Criterion に達するまでの trials

Group	匹　数	平　均	δ
12	7	7.43	0.30
24	7	6.36	0.40
36	7	4.21	0.61

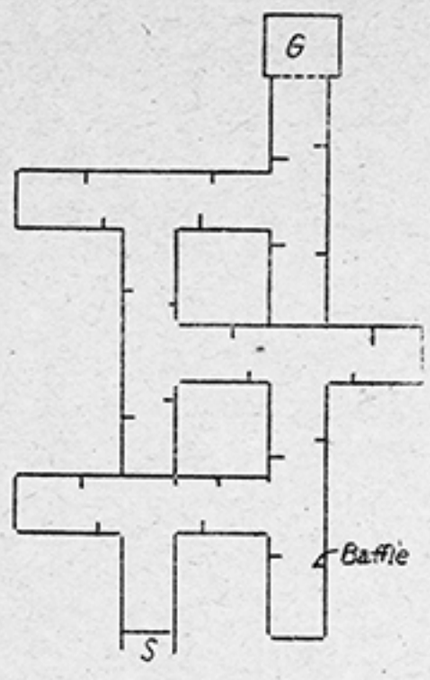
Criterion に達するまでの errors

Group	匹　数	平　均	δ
12	7	65.1	19.1
24	7	38.6	14.5
36	7	22.4	7.8

ストを二つの群の間で行っても有意義な差である事が示される。

この実験の後三週間経って再学習を行う。その結果は試行数に就いて示すと、12時間群は皆 Frwstration を起し動かない。唯、一匹だけ目標に達した。24時間群は一匹死」。

用いた迷路図



概観すれば再学習の速度即ち保持の度は、動機づけの強い程大であるように見える。「保持度は頻数に依存しないで動機づけの差による」といいたいのであるが、この結果からそのように云えるようでもあるし未だ確実には断言出来ない余地があるとも考えられる。

青年教師を対象にした調査
青年教師は如何に生きるべきか

早　川　元　二

(一) 調査対象—場所—群馬県教組甘楽郡支部青年部
被験者—青年教師（男女）三〇才—一八才—六〇〇名
集計実数—男七五名、女七五名、計一五〇名。

(二) 調査の方法、及意図
質問紙法による。調査意図は一般的な心理学的調査の如く、外的刺戟の反映、反応を、その刺戟に対する適応の状態を見るだけでなく、その刺戟も世界史的背景に於ける現日本の社会問題（平和問題）という大きな刺戟として考え、その刺戟に対する前向きの状態、つまり行動へのかまえを見る。質問紙の内容は、㈠平和について、㈡教育及び教育者、㈢子供について、㈣教育者の理想をはばむ者、㈤明日えの歩み、であり、この五項目の関連性を考慮して立案さる。

(三) 結　果
① 平和については、日教組の倫理綱領に対す態度（反映、反応）は、次のA、B、C、D、E、Fの六項目に、その平和への意識の強弱により分類され、B群が多く、F群は無記入者で非常に多い。

A群の特色は行動的で、積極的でしかも教員はプロレタリアであるという意識の上に平和を考え、B群は平和賛成であるが、行動的では無く、行動への不安を持つ、C群は消極的平和愛好者で、観念的賛成者であり、D群は平和意識が不統一であり、矛盾を含む。E群は平和を唱う倫理綱領の不賛成者で、しかも、その理由として経済問題、アメリカの援助を上げる功利的現実論である。

② 平和に対する態度が如何に日常の教育者としての生活の中に反映するかを、質問項目の㈠以下と㈠とを関連されてみると、A群は凡ゆる教育問題の中に平和意識が反映し、社会的意識と教育的意識は統一されている。その反対としてのE群は直接の反映は認められないが、現実的功利的教育観が関連してうかゞわれる。

特に年少労働に対する考えは、A群は農業経営の不備を指適し、E群は子供への精神的利益を高く説いている。

但し、この平和意識と教育意識とは全般的には全く統一と関連性をかき、ジグザグなもの多し。これは現代青年教師の共通せる面ではないか。更に、全般的にA群よりF群に致るまで共通せる面として給与の改善という生活問題があるが、それを組合的意識による解決へ、高めているその度合も又、平和意識の強弱と連なるものがある。

	単位	A	B	C	D	E	F	計
男	人	2	40	9	7	1	16	75
	%	2.66	53.33	12.0	9.33	1.33	21.33	
女	人	0	20	13	5	2	35	75
	%	—	26.66	17.33	6.66	2.66	46.66	
計	人	2	60	43	12	3	51	150
	%	1.33	40	14.66	8.0	2.0	34.0	

音楽学生の日課について

佐　瀬　仁
波　多　野　完　治

一、問題の設定　大学の新らしい理念を受け受れて音楽学校が大学となって四年、その間大学たるに必要な設備、教科の充実に努めてきたが、それが完成に近づくにつれ教授、学生間に「大学」に対する不満の声が高くなった。

A　学　生

1、在校時間長く、専門技術勉強の時間が充分である。

B　音楽科教授

1、学生の勉強が不充分。

C　一般学科教授

1、学生の学習態度が消極的。

これらの不満の所在を実態的に把えようとしたのが、本研究の目的である。

二、方法　国立音大生三〇名に対し、左記項目による日記を一九五一年一二月一日より三ヵ月間つけさせた。

Ⅰ、在校時間　Ⅱ、術科の研修に費した時間　Ⅲ、一般学科の勉強に費した時間　Ⅳ、自由読書　Ⅴ、音楽鑑賞　Ⅵ、趣味娯楽　Ⅶ、アルバイト　Ⅷ、其他（交通等を含む）Ⅸ、睡眠。

三、整理　提出日記数一九中記載不良四。一五の日記から左の三表を得た。

♂　四名、♀　一一名

1　表

性別＼項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ
平均	六・三四	二・一五	〇・四五	〇・一〇	〇・一七	〇・〇七	〇	六・五三	七・一五
♀	六・三〇	二・四五	一・〇〇	〇・二〇	〇・二五	〇	〇	六・〇〇	七・〇〇
♂	六・四五	一・四五	〇・三〇	〇	〇・一〇	〇・一五	〇	七・〇七	七・三〇

二月一日（金）の日課時間配分

声楽科二名、ピアノ科二名（四名共女）

2　表

日課項目	配分時間
Ⅰ	五・〇一
Ⅱ	三・二五
Ⅲ	〇・三三
Ⅳ	〇・二六
Ⅴ	〇・二五
Ⅵ	〇・〇〇三〇
Ⅶ	〇
Ⅷ	七・〇二
Ⅸ	七・一六

一月一四日（月）――二月一日（金）間を平均した日課時間配分

〜大学基準による勉学時間〜　〜自由勉学時間〜　〜私生活時間〜

3　表

日課項目	配分時間
Ⅰ	五・〇
Ⅱ	三・三〇
Ⅲ	〇・三〇
Ⅳ	〇・三〇
Ⅴ	〇・三〇
Ⅵ	〇
Ⅶ	〇
Ⅷ	七・〇
Ⅸ	七・〇

一、二表を基にした抽象的日課時間配分

四、結語

1、音楽学生は一般教養に関する勉強時間が少い。

2、それに比して術科の在宅勉強時間が多い。がしかし、音楽科教授（特にピアノ科）の要求は「現在日本の技術水準からは五時間はどうしても必要」という。

3、この要求は深く日本の洋楽文化の後進性に根ざすところがあるので無理なものといい切れない。

そこで報告者たちは技術修得を主眼とする音楽大学の現況では、新制カキュラムの実施につき直接大学管理の上からも、それを指導する行政面でも新たに工夫を要するものがあると考える。

専門家的水準に達しない、そして一般的教養的には他大学出身者に及ばない音楽家を出さないために。（一九五二・七・五）

親と子供の関係の心理学（親から見た子供）

児玉省
松山淑子

この研究は、東卒及び地方の公、私立の小学四、六年中学一、三年、高校の生徒の親達約千名に対して質問紙法に依りした研究である。質問紙法は、一部分は我々の側に於て答えの類型を定めておいて、それに対する撰択的反応を求めたのと同時に、こちらの質問に対して被験者から自由なる表現に依る反応を求めると云う二方法を併用した。取挙げた項目は、「素直さ」「自主性」「手伝い」「物をはっきり云う」「元気さ」「礼儀作法」「男女の友人関係」「両親の幼少時との比較」等の項目である。撰択反応の場合は各項目を品等法にして配列した。「素直さ」については、男子の場合「一応は親の云う事を聞く」は小学校から高校に至る迄殆ど変化がないが、「云う事を聞かない」は、小学校から中学校になると二倍にはね上っている。女子の場合は、「一応は親の云う事を聞く」が小学校以後、漸次増加し、「云う事を聞かない」は、中学校と高校の間で半減して来る。子供の「男女間の友人関係」については、小学校から高校に至る迄男女青少年共親の目からは、その関係が正しく行われているかと云う評価が、男子の場合年令と共に増加するのに対して、女性の場合は少しではあるが減少の傾向が見られる。しかし「良くもないし、悪くもない」と云うのが全年令を通じて60〜70％を占めている。戦前の子供に対する親の評価と、現在の子供に対する親の評価を比較して見たが、中学、高校、男女共に今の子供達は戦前の子供達に比べて可成反抗的に映っているし、又、自主性の点に就ては現在の子供の方がはるかに自主性があると評価せられているし、行儀の点については、現在の青少年の方が行儀が悪いと見られているし又、元気の点

に於ては現在の子供の方がはるかに元気があると評価せられている。現在の子供及び戦前の子供の長所短所を親に自由に挙げさせたが、その反応の数に依って見ると今の子供の長所と短所との中、次の様な項目が親の評価中に自と最も多く現われて来た項目である。今、その反応数の順序に依って並べて見ると、「礼儀がある」「協調的」「素直」「自主的」「元気」「勉強する」「経済観念がある」「意志が強い」「子供らしい」「落着いている」「積極的」「親切」と云う様な順で現われている。最後の四、五項目については反応数が少くて、その順序も必ずしも明らかでないが、最初から六、七番は、はっきりと順序を読み取る事が出来る。これらの項目は結局親が子供を評価する場合に於て最も多く取挙げられる角度で、親の代表的な評価の視角を代表する物である。又親の子供時代と今の子供の比較をさせた場合単純に今の子供の長所、短所を挙げさせた場合と、その評価が似かよっていながら又、或る点ではズレを示している。この事は現在の子供に対する評価が親の子供時代の回想に依る評価と戦前の子供に依る回想の評価との合作である事を示す物である。

遊戯による子供の家庭の問題の分析の試み（勤労）

児玉　省　岡野伊津子
斎藤愛子　井出恒子
新津淳子

ハーヴァド大学のロバート・シャース及び其他が試みている研究にヒントを得て開始した研究で、就学前児童に実験的に設定した家庭を模した遊戯場面に両親其他の家庭成員を模した人形及び各種の家具の玩具を与えて遊ばせて、その遊戯に於て表われる行動のパターンから、子供が家庭に於て持つ問題、とくにフラストレーションの問題を発見できるかどうか？　ということを目的とした研究である。家庭場面は 68cm と 119cm の大きさ、応接間、寝室、茶の間、子供部屋、玄関、風呂などあり、人形は父、母、女の子二人、男子一人。家具は机、ラジオ、鏡台其他、点のものを配した。子供をつれてきて室や家具、人形などを説明して自由に遊ばせる。四、五才児約三十名を各二回、または三回ずつ実験した。

父親人形、母親、赤ちゅん、兄さん人形等を色々な形でいじめる子供があった。お風呂の中に入れてフタをする。物を積み重ねた一番下にする。父と兄をけんかさせるなど。この実験と並行して行った家庭の状態の調査、近所での聞き取り、または子供自体からの聞きとりなどから得た悪報と前述の行動が関連することが推測された。結論的なことを述べると、

(1)遊戯場面に見られる進攻性行動が子供の家庭におけるフラストレーションに基づく可能性が充分にあった。(2)然し表現された進攻性行動がすべてフラストレーションに基くとは断定し得ないものがある。(3)然しフラストレーションに関係しないにしても、家庭のしつけの欠如を如実に現わしているものがあった。(4)フラストレーションの現われ方は必ずしも積極的進攻性形式をとらず、時に退嬰性行動、または消極的進攻性行動の形をとっている。例えば子供が反感を抱いている兄や弟の人形を全然とり上げないなどの如き。(5)これらの不適応現象の現われは、子供の遊戯中の全部に至って現われず、むしろ部分的に、実験のごく小部分に現われるの可能性がある。(6)親や子供の口から聞き得なかったまた観察し得なかった子供の家庭での問題を、このテクニークによって暴露し得る可能性が充分にある。即ちその意味で家庭での問題検出または確認に利用し得るであろう。(7)その他子供の家庭の文化状態、躾けの有様なども反映していると信ずべき理由が充分にある。

青年の実態調査研究

岡田在輔
四宮晟

目的　勤労青少年（満十五才満～廿五才）の生活実態を明らかにし、社会教育上的見地からの実際指導に資するにある。又従来の青年心理学は主として学生のそれに限られている事に対する批判・吟味を試みようとするものである。

方法・時日　県下青年人口の約一三〇分の一をサンプルとし調査対象一、五〇〇名を選び、これを市町村部に層化し、調査区をランダムで抽出し、その調査区から五〇～一〇〇名をランダムに抽出した。回収率は男子八九・六%、女子八五・四%であった。調査補助員として県教育委員会の社会教育課諸員を煩わし、昭和廿六年十二月に実施した。

内容　青年の知的生活（青年と文化―新聞・雑誌・書籍・ラジオ・映画・青年の望む施設・悩み・崇拝人物・人生観・宗教と信仰）、情意生活（結婚と恋愛）、社会生活（友人関係・小遣・職業・クラブ・政党・社会観・余暇）について調査研究された。

その結果所謂学生青年心理と勤労青年心理とには部外的に相当異った傾向のある事が認められた。例えば興味をもつ新聞・雑誌・書籍の内容、文化受容の方法、信仰の態度、悩みの種類、余暇利用、小遣い等に於いて。

又実際指導に当って必要な諸点（例えば、文化的施設の充実をはかること、母親学校、恋愛結婚の指導、友人関係の指導等の必要性、映画利用による教育、学校教育上の欠陥）等をも知る事を得た。

学童の社会性の発達

田中敏隆

田中寛一博士が測定と評価の第五号に性格の測定法―特に社会性の発達度検査の試案と題して、個人の性格がはっきりあらわして作業する場合の成績と、個人がグループの中にかくれて姓名がわからない場合の作業成績とを比較することによって、個人の社会性発達度の評価の―一資料にすることの可能性を提案しておられる。本研究はその実験的検証をしたのである。

検査材料は抹消法を使用し、六日間の練習後、本実験に移った。結果

① 教師判定の評価と本実験による評価との間にやゝ相関あり、本テストは社会性発達度の一資料になり得ることがわかった。

② 発達的に見ると、他の心的発達と同様に見かけ上周期であり、そして顕著な発達は、二年、六年に発見された。

③ 本実験から社会性の品等段階の一提案を示した。

被験者、小学校一年生（五十名）、二年生（五十名）、三年生（五十名）計百五十名。

結果とその考察

一、等質な白画紙に対する児童自作の人物画と比較すると、頭部呈示図形の場合は頭部の全身長に対する割合が大となり、躯幹呈示図形の場合はその割合がほゞ近接する。

二、頭部呈示図形を手掛りとしての作品についてみると、(1)一年、三年、五年と学年が上昇するに従って頭部の割合は減少する。(2)呈示図形の大さが増大するに従って頭部の割合は増大し、しかもその増大の度合は下学年程著しいが、然し一方、補足される躯幹の絶対値をみると、下学年はほゞ一定で高学年程その増大の度合が著しい。即ち、高学年になると大体頭部の大さに応じた躯幹を補足することが知られる。

三、躯幹呈示図形を手掛りとしての作品についてみると、(1)一年、三年、五年と学年が上昇するに従って頭部の割合は増大する。呈示図形の大さが増大する。(2)に従って頭部の割合は減少し、しかもその減少の度合は下学年程大きいが、補足される頭部の絶対値に於ては、下学年は余り変化なく高学年程その変化が大である。即ち、高学年になると大体躯幹の大さに応じた頭部を補足することが知られる。

四、頭部呈示図形の場合と躯幹呈示図形の場合の両者について比較すると、(1)呈示図形の大さに基づく変異傾向が逆になって現われ、(2)又学年による変異傾向も逆になって現われる。(3)両者の頭部の割合をみると、高学年では概して変化なく、下学年では頭部呈示図形の場合に頭部の割合が大で、躯幹呈示図形の場合にはその割合が小となって現れている。

幼児のつたえ（大人へのつたえ）

其の1

天野章

対象 学令前幼児 五、六才 百名 都内某保育園

期間 一九五〇年九月～一九五二年三月

方法 実践観察法（実践観察法の説明は昨年七月の学会で明らかにしたので省略す）

幼児の大人に対する「伝え」が、外部に現われた幼児の行動を集団と関聯させて考えず、その外部への現われを教育者の現象的判断に基づいて処理される恐れがあった。従って、しばしば幼児の正当なる要求不満も保育実践に取上げられることが出来ずに終った例を、しばしば見受ける。このことは、幼児の人格形成に有害な問題を与え、幼児の大人に対する考えをゆがめたものにしてしまう恐れがある。私たちは、この保育指導上の混乱を正しく導き、大人と子供の関係をより一層正しい認識にもっていくために、集団と伝えを関聯させてここに取上げてみた。

こゝに発表するものは、一応未整理なもので結論とは云えないが、中間報告として提出する。尚枚数の関係並に時間の関係上、言語に現われた幼児の大人に対する「伝え」だけを発表することにします。

集団の規律と「告げ口」一九五一年九、十月某保育園では、保母の交替並びに保育の無方針によって、クラスの規則が失われ、子供の状態もバラバラで、集団としての美しさを失っていた。この様な時に、次の様な「告げ口」が多く現われた。即ち身体をきずつけることや、個人的所有関係の争奪等、例、「先生H君ブッタノ」「A先生○君、僕の粉トッチャウノ」等々

次に一九五二年一月～三月、集団の規律が確立され、子供の状態も社会性が高められ、その結果、集団の規則違反、或いは単純な道徳的違反に対する「告げ口」

幼児の人物画

藤野藤俊

本実験は、白画紙に描画上の一つの手掛りとして人物の頭部或は躯幹をあらかじめ視覚的に呈示し、児童をして、人物の他の部位即ち躯幹或は頭部を補足的に描かせて人物形態を完成せしめたならば、如何なる変容がみられるか。即ち、学年によって、或は呈示図形の種類によってなんらかの差異がみられないだろうか、ということを問題にしたのである。

手掛りとしての呈示図形の種類は、

頭部呈示図形（縦長、二糎、三糎、四糎）

躯幹呈示図形（縦長、十二糎、十八糎、二十四糎）

例「先生ネ○君ネエ、ヘンナモノモッテキタヨ」「先生Lサンナラバナイノ」等々

以上第一の例に於いての告げ口の場合、集団の乱れを考慮しないでは、いつまでも、同じような告げ口の続出であり、集団の解決によって、このような告げ口にも解決できるのではないか。又二番目の場合でも集団に注目しなければ、正しい要求も発展させることは出来ないのではないか、従っていずれの場合でも集団との関聯を持たせて指導すること（勿論個人的特性を重んじながら）が重要な役割を演んじるのではないか。以上問題提出の形で報告にかえる。

幼児のつたえ（大人へのつたえ）其の2

天野章
三井昇

対象、期間、実験の方法、其の1と同じ、

其の1で説明した集団と「告げ口」の関係をもう一歩深くつっこんで、今度は簡単な類別を行ってみます。

A、個人的告げ口で集団意識は全然なく、孤立的で個人の身体をきずつけたり、個人的所有関係が破れたりした場合の訴え。

B、集団の中に、何等かの理由で入れないで孤立的になっているか、或る集団（グループ）から意識的にボイコットされている時に、集団の中へ入りたい場合、自分一人の力では入れないとき、大人に訴える場合。

C、集団内に於けるグループとグループの衝突、保育が正しく実践されない場合集団内に於いて、小さな権力者を中心にして、グループが形成され、そのグループの所有関係の衝突やあそびの衝突。

D、Bの場合とは逆に集団に入れない子供が、その集団に対いして妨害をなし集団内の子の子供が訴える場合。

E、一般の道徳から考えて悪いものと認められるもの、その地域、その園の常識となっているものの違反に対しての訴え。

F、その集団の規則となっていることに対いして破った場合の訴え。

G、Fの場合と同じであるが、特に集団指導者に対して批判する場合。

H、社会性が豊かで、集団意識が強く、集団内の子供達の為に色々な規則を考えたり、集団内の他の子供のことについて、建設的に訴える。尚色々な訴えの中で、個人の心の内面的動き即ち、集団を真にたかめるためのものか、或はそのような訴えによって自我を満足させる為のものかは、なか〳〵みわけることが出来ず、実験の手続きが複雑なので次の機会にゆずる。

以上の幾くつかの類別はまだ不十分の点が多いのですが、一応、告げ口と集団内の関係の分析から、このように別けてみました。

乳児の言語発生期における意味形成過程

小倉喜久

意味形成について行った私の諸実験を、発生的に検討する目的で行った私の長女の言語観察より生じた記録である。生徒七ヵ月より一年半に到る間の、対象と結びついた有意味語のみについて考察し、次の如き過程の存在が観察された。

1)、転化過程　乳児の言語は一つでいくつもの意味をもつ（対象と結びつく）ことがあり、しかもその対象の数が後に多くなったり、或は順次変化してゆくことがある。この過程を名付けたもので、乳児の意識内に於て対象間の全体的性質の類似のみ認められて、その差異の発見されぬとき、又は差異は認めても、それを分節化すべき言語の修得以前にみられる過程である。

2)、分化発生過程　乳児が語の修得によって、いくつかの意味を含んでいた語が、順次より狭い意味、数の少い対象へと制限使用されてゆく過程で、一つの語に含まれた対象間の差異発見、要求の不便、により、内的必然から語の修得はなされてゆく。

3)、平面的転換過程　一つの対象が次々と異った言語によって表出される過程で、語の社会化機能の発達の面を示すものであり、他人に理解されたい要求が発生の原因となる。

4)、連結過程　二つ以上の語の並列連結により一つの対象を指すもので、次第に対象の移動変化をも示す様になる。これは、対象に適合する言語の分化或は修得の間にみられる現象で、自己の既得言語連結によって代用するという自発的形成の特色をもつ。

5)、統合過程　分化された語が、一つの包括的な言語に結合される過程で、抽象性とか概念化の萌芽の時期であるが、幼児には殆どみられない。

6)、消失過程　使用された言語の消失してゆく過程で、2)、3)の原因によって生ずる。

7)、リズム分化過程　歌の如き全体的模倣によって得た言語の分化してゆく過程で、必ずしも正当な分化は行われぬし、全体としての記憶が、構成語の分析に到ることの困難がみられ、語の増加に対しては、あまり積極的な影響はない。

他に累加省略転用等の系列も考えられる。

幼児の質問について

竹田俊雄

この研究は幼児がどのような場面においてどのような内容の質問をするか、幼稚園の園外保育との連関におい

て明らかにしようとしたもので、東京都内某幼稚園児六〇名（五才児四一名、四才児一九名）について、昭和二七年五月、新宿御苑に母親等附添で園外保育の際、附添に質問した事項を質問紙法で附添に回答を求めたものである。

この結果によれば、幼児の質問は、疑問の場面におけるもの（例―「お池のお花は何？」）の外、確認の場面におけるもの（例―バスの止った時に「赤信号なので止ったのね？」）、推定の場面におけるもの（例―池の水のはねた時「何かいるのね？」）許可を求める場面におけるもの（例―「お友達と遊んでいい？」）失望の場面におけるもの（例―「お池にボートはないの？」）、不満の場面におけるもの（例―今までに「どうしてここに連れて来てくれなかったの？」）、不安の場面におけるもの（例―母の姿が一時見えなくなったのに対し「もうどこへもいかない？」）等が認められる。

疑問の場面における質問も、名称も問うもの（例―池の中ではねる魚を見て「あれ鯛？」）、状態を問うもの（例―蓮の花を見て「あれは花が落ちてるの？」）、状態の理由を問うもの（例―池の面に急にさざ波が立ったのを見て「どうしてあんなになるの？」）、行動規準の理由を問うもの（例―「なぜ芝生の中に入ってはいけないの？」）、行動の理由を問うもの（例―紙くずがたくさん散っているのを見て「くず箱があるのにどうして捨てないの？」）、機能を問うもの（例―木の名札を見て「あれ何、何て書いてあるの？」）等が見られ、社会乃至行動に関する質問と、自然に関する質問がある。

これの指導が実際保育の問題となる。

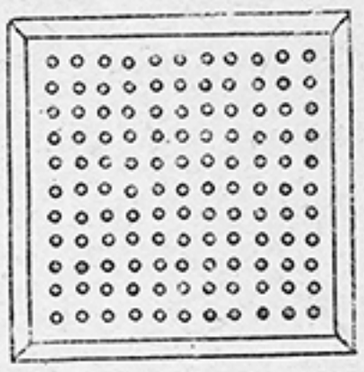
形態把握に於ける児童の知能

細　井　葉　子

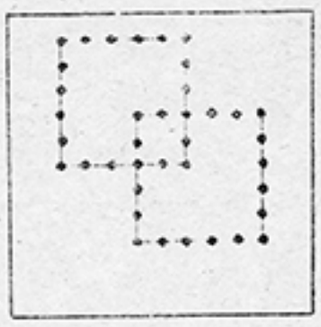
最初図1に示すような〃はめこみ板〃を考案して、この上に図2のような図形（六種類）をこまをはめこんで作らせたところ、次の事のあきらかにあらわれるのを見出した。即ち

1、児童によってはめて行く順序が異っている事。

2、出来上りに正不正がある事。



第1図



第2図

以上の二点に着目して、これをさらに考究して行くと云うのがこの実験の目的となった。

はめて行く順序は次の①、②、③に分類された。

① High Articulation ② Lower Organization ③ Irregular Type この①及び②は両者とも形にしたがってはめたものであり、③は形でなく線である事が考えられたのでこれを次の二つに分ける事にした。即ち、① Form-gurded ② line-gurded そして、この①のはめ方を行った時得点1点をあたえた。例えばある児童が六個の図形に対して全部のはめ方を行えば六点となした。このようにして得た成績と、I.Q. との関係を考察すると、これは大体正の相関を有する如く示された。然し、I.Q. の高い段階、即ち、六年生の成績はやゝ異っていて、I.Q. がかなり低くても、①のはめ方を行っている児童がかなり多数あった。以上(1)に対する考察、即ちはめて行く順序に対する考察である。

(2)即ち正確に出来たか否かは(1)の場合と同様に、正確に出来た時に、一点をあたえて、この得点に着目した。即ち、六個の図形全部が正確に出来れば六点となした。この結果、正確に出来る事は I.Q. の増加によってあきらかに増している。換言すれば、I.Q. が高い児童に、成績のよい児童が多い事が示された。

以上がこの実験の結果である。この(1)において扱った結果を児童の形態把握の能力と考えてよいかをやゝ考究して見たかったので、紙に同じ図形（六種類）を画かせた場合との比較を行ってみた。その結果はめこみ作業において①に属するものが画かせた場合①になる事が多く、即ち両者がかなり一致している事が見られた。この結果から絵がそうであるのと同程度にこの成績の上には形態を把握しているか否かがかなりあらわれているのではないかと考えた。もしあらわれているとすれば、実験の結果から、児童の形態把握の能力との間にはかなりの正の相関が見られると考えられるのではないかと思う。

この〃はめこみ板〃の作製及びはめ方の分類に関しては H. Werner の一九五〇年一二月 Joun of Genetic Psy 誌上に発表した論文より多くヒントをえた。

都市児童の恐怖に関する調査

前田三郎
上田敏見

田舎の児童に関する恐怖に就いては既に上田敏見氏によって発表された。今回は都市児童に就いて発表す。被験者は大阪市内小学校の一般的な児童一、三〇〇名を選ぶ、結果の概要次の如くであった。

(1)恐怖の対象　一般に動物、自然現象、社会現象、人に関するものが多数を占める。学年の進むに従って動物、人に関するもの、想像物は少く、自然現象、社会現象は多くなる傾向を示す。その詳細は略す。

(2)恐怖の理由　対象と恐怖を感ずる児童と恐怖の場面との相互関係より考察される。対象では、その形態、その活動（生命の危険を与えるもの、所有物の損失を生ぜしめる）可児童自身では、経験の有無、感情的（何となしに恐ろしい）なもの、場面では対象の生起する情景等が見られた。

(3)**恐怖に対する反応**　中止的、消極的、積極的反応に分類される。中止的、消極的反応が大部分で積極的反応は僅少であった。（詳細は略す）

(4)**恐怖の現実度**　学年の進むに従って児童自身が実際に経験したものが多くなっている。

初潮に関する一位相の研究

大平勝馬

（一）目的

本研究は発達途上転換期にはいる思春期において体験する初潮の年令的考察、情緒的反応とそれが事前の性教育との間に持つ関聯、及び初潮期を通して見た成熟遅速と心身発達との相関的考察をしようとするものである。

（二）方法

被験者は初潮期を確かに記憶している者及び未潮者を含めて中学二、三年高校一、二、三年生計一二三八名。方法は一方初潮有無、時期、情緒的反応調査を行い、他方知能向性国語数学学力検査を行い、且つ学校資料による身長体重調査を行って統計的に整理検討した。

（三）結果

結果の概要中初潮の現れる学年別割合及び平均年令は Table 1. の如くである。

初潮に関する事前教育を受けた者は全被験者の八五・

Table 1.

被験者	調査時平均年令	調査人数	有潮者数	有潮者%	無潮者数	無潮者%	初潮期平均年令	初潮期平均年令 S・D
中三	13年10.4月	304	60	19.73	244	80.27	13年5.3月	5.90月
二	14：9.8	428	316	73.83	112	26.17	14：0.3	6.57
学一	15：9.5	196	174	88.54	22	11.22	14：5.4	10.13
二	16：9.2	165	162	98.19	3	1.81	14：7.8	10.14
三	17：10..	145	145	100.	0	0	14：7.6	10.42
計		1,238	857		381		14：4.5	9.50

Table 2.

情諸的反応	%	順位
平気であつた	16.01	4
初めての珍しいことで興味をもつた	3.42	8
残念に思つた	6.83	6
驚かされた	16.01	3
愉快で誇りを感じた	3.83	7
不愉快に思つた	24.07	1
悲しかつた	12.58	5
恥しいと思つた	17.28	2

Table 3.

被験者	要項	人数(%)	初潮平均月令	身体検査時の平均歴月令	身長(cm)	体重(kg)
中二	無潮組	80.27	—	166.3	143.9	37.2
	有潮組 遅	11.18	165.07	166.9	146.5	39.8
	有潮組 速	8.55	156.83	165.8	148.4	40.5
	計	100.	161.30	166.4	144.6	37.7
中三	無潮組	26.17	—	177.0	144.9	38.4
	有潮組 遅	35.51	174.04	177.0	150.9	42.5
	有潮組 速	38.32	162.72	177.0	152.1	44.9
	計	100.	168.30	178.0	149.7	42.3
高一	無潮組	11.22	—	187.2	146.8	39.2
	有潮組 遅	48.98	180.63	189.9	149.6	44.0
	有潮組 速	39.80	165.14	189.9	151.3	46.4
	計	100.	173.40	188.9	149.9	44.4
高二	有潮組 遅	50.65	183.29	202.1	152.5	44.5
	有潮組 速	49.35	167.06	200.5	154.3	47.5
	計	100.	175.90	201.3	153.4	46.0
高三	有潮組 遅	57.14	183.73	215.9	152.7	45.7
	有潮組 速	42.86	168.45	212.6	154.0	48.6
	計	100.	175.60	214.5	153.2	46.9

Table 4.

被験者＼検査		知能 J・Q	読方成績 (100)	算数成績 (100)	向性
中二	無潮組	101.45	55.49	60.13	51.73
	有潮組 遅	109.35	60.07	68.50	52.14
	有潮組 速	103.36	56.36	59.27	52.18
	計	102.49	56.08	60.99	51.83
中三	無潮組	97.97	53·45	49.58	51.15
	有潮組 遅	97.30	57.76	58.37	52.74
	有潮組 速	102.07	66.41	62.07	52.12
	計	100.29	59.93	57.45	52.08

五%、その教育者は教師六五・五%母一九・〇%友人七・七%他七・九%となっていた。

初潮に伴う情緒的反応調査の結果はTable 2.の如く可成りに多くの消極的否定的情緒を伴うことが認められ、教育無き者は有意の差をもつ然らざる者より多い。

身長、体重の有潮者（平均より速、遅二組に分つ）無潮者別平均値はTable 3.の如く初潮の早い者は身体発育にも一般的に優位性を保持していることが認められる。

最後に前表と同じく有潮者、無潮者組別知能指数、向性指数、口語及び数学学力検査成績（百分段階点）平均値はTable 4.の如くである。知能、学業成績共に中学二年の一部特例を除いては全般的に成熟組が優れている。この中学二年の初潮早い組は初潮期平均年令一三才〇・八ヵ月にして著者の全被験者初潮平均年令一四才四・五ヵ月に比し約一年四ヵ月早い組である。このような特に成熟の早い者に特例の現れる如き傾向を他の研究においても発見しているが尚今後の研究にまたねば断定は出来ない。向性指数にも稍々差違が見られ早熟組がより外向的となっているが充分有意の差とは認められない。この点は今後の研究にまたねばならない。

日本人を母親に持つ純血乳幼児と混血乳幼児との精神発達に関する比較研究

渡辺徹
山内茂

一、目的　敗戦の申し子、占領の落し子として生れながらに宿命の星を背負った日本人を母親に持つ混血児達は、如何なる精神発達をなし、又純血児と比較して、どのような差異が見られるかを究明せんとするものである。

二、方法　愛育研究所案の乳幼児精神発達検査法。

三、被検者　収容純血児は東京都杉並区S乳児院の収容児・同K乳児院の収容児・混血児は神奈川県大磯町E、S、ホームの収容児、家庭児は神田保育園の園児。

四、検査結果　A発達偏差値の比較　イ、家庭純血児と収容純血児との発達偏差値の平均を見ると、二才から四才までを通じて有意たる差をもって、家庭純血児が優れていて差の信頼度も高い。ロ、収容純血児と収容混血児との比較において、乳児は純血児が混血児よりも相当の差をもって優れていて差の信頼も非常に高い。

幼児においては数値の上では純血児の優れた年令もあり、混血児の優れた年令もあるが、信頼度は低いのである。ハ、家庭純血児と収容混血児との比較においては、各年令を通じて純血児が混血児よりも優れて居り、両者の差も三才をのぞいて信頼が出来るのである。

B各質問系列の正答率の比較　各年令を通じて答率は純血児混血児ともに同傾向である、しかし社会性の問題に於て混血児は純血児よりも各年令を通じて劣っている。

材料処理の問題において三才児は純血、混血両者とも一〇〇%を示したのは、問題数が二題であり、又問題内容がこの年令には平易であったのかも知れない。

五、結論　以上の結果により純血児と混血児との精神発達における相異は、乳幼児精神発達検査法では、あまり認められず、又混血児はこの様な特異性があると云う様な発達もなく、こゝに現れたものは環境として施設の影響の結果ではないだろうかと思われる。

盲児に於ける友人関係について

榊原清
佐藤泰正

育児の社会性発達の一環としてなく関係の研究は大切なことであるにも拘らず、これまで全く手のつけられない領域であった。そこで、私たちはこの課題についト、正常児との比較に於いて研究を進めることとしたが、どちらかと言えば盲児という特殊児心理探究に重点を置いた研究になったというらみがないでもない。しかしながら私たちとしてはこの研究が盲児の友人関係はもとより、特殊児一般の友人関係、又強いては、正常児の友人関係に対して何らかの示唆は得られるものと信じている。何となれば、私たちの立場は、特殊児研究が単なる特殊児研究に止まらず、一般児研究の基本的原理研究に多く貢献を確昌し、特殊から一般へという理念に基いて研究を行っているからである。

さて、本研究で取扱った問題は、主として盲児の友人関係を量的、質的面から考察した。量的には、育児の校内、校外友人の有無とその数、又親友の有無との数を調査し、それを学年発達的、生活年令的、性別的、視力欠損的年令の観点から考察し、大雑把乍ある程度の結論に達した。

1) 年令的に校内なく数は増すが、一四、一五才になると最高になり、後はそれが連続する。校外友人数も年

令を追って多くなるが、やはり、一一、一二才を契機として固定してくる。親友をもつ割合は児童幼期青年期に於て発達につれて多くなるが親友の数は減少する。

2) 学年発達的に眺めると、各学年小一〜小四までクラス人員数が、そのまゝ友人の数になっているが、小五〜小六以上になると校内友人数は著しく増してくる。

3) 性別に考察すると、校内友人数について小学期は男女同数であるが、中高等部に於て男子の方が多くなる。親友の数も男子が女子に比してわずかであるが多い。

4) 視力欠損別的考察では、全盲と弱視という二つのカテゴリーについて校内友人数は男子とも変りない。(同じ盲人という意味でそうなるようである) 校外友人については親友の差は可成り反映し、友人をもつ率、その数とも弱視が優っている。親友の数は全盲が多い。

5) 親友選択については、同性を選んだものが異性を選んだものよりはるかに多い。又全盲は全盲を親友にも つ率が多いが、弱視は全盲、弱視、晴眼者を同率に親友としてもっていた。又級別では、同級生を親友に選んだのが一番多く、次は上級生で、下級を選んだのはわずかである。

質的面について、友人関係成立、分離の主観的理由を調べた。その結果は、相互接触の機会が友人関係成立要因になることが一番多く、次は性格的特質が上げられる。分離要因について、低学年では暴力的のも、高学年では精神的なのもをあげていた。

他方、本研究中最も重点的に研究したのは、次にのべる友人関係成立の客観的要因の比較である。客観的要因としてはこれまで、性、年令、知能、その他の類似が多く影響するとはいわれているがどれが最も多く作用するかは未解決であった。そこでそれらのウエイトを研究することを目ざした。まず、ゲス・フーテストを行い、友人関係が成立されていると見られる二人の間の性、年令、学級、視力欠損、職業等、類似を考察し、どれが一番多く影響するかを考察した。結果は全体的には同性であることが最も友人関係成立に影響していた。次に同学級、同職業(但しこれは高学年のみ)生活年令はずっと下り、視力欠損的影響は最少であった。勿論、発達によっても結果は異っている。

書記適性検査の構成方法

浅井邦二

書記適性検査については既に種々作成されたものであるが、こゝでは筆記検査法による適性検査の Pretest を例に、新しい検査を構成した過程について述べる。すなわち第一職務分析、第二サブテストの選定、第三 Pretest の実施とその結果分析、第四検査の編成、という過程である。第一の職務分析は検査に不可欠なものであるが今回は不十分を認めての上で人事院で公示した職務明細書を資料とした。第二のサブテストの選定においては職務の要素をもとに、GATB などを参考とし、Clerical aptetude test のサブテストとして五つのサブテストを選び、この他比較のため Mechanical aptitude test のサブテストとして五つのサブテストをこれに加えた。第三の Pretest の実施とその結果分析においては被験者として普通、商業、工業の各高校生計約三〇〇名を対象とし、各学校の種別差の基準として全サブテストの総合、Clerical test の総合、Mechaneical test の総合という三つの成績を比較し、その差を検定した。その結果は全体の総合成績では三校の種別に有意な差を認めず Clerical test においては商業高が他校より有意な差ですぐれ、Mechanical test においては工業高が他校より有意な差ですぐれた成績を示した。又 Clerical test と Mechanical test との検査の違いによる成績の差は普通高においては有意な差を示さないが商業高、工業高においては前者は Clerical test の成績の方が高く、後者は Mechanical test の成績の方が高く、それぞれ有意な差を示した。これより Clerical test として選ばれた五つのサブテストは商業高の生徒に Cleerical aptitude を有することを前提として、妥当性を有するといい得るとした。次に各サブテスト間の成績の内部相関から Thurstone の重因子分析法により因子分析を行い、Clerical test のサブテスト書記的知覚の因子と、断定は難しいが数的なものに近い何かを測っている因子とを見出した。なお参考として行った Meohanical test のサブテストには空間的因子を見出した。第四に検査の編成ではらせん式 (spiral) による編成方法を検討し、数群の被験者に別に行ったこの方法による検査結果が各サブテスト別に行った検査結果と相当高い相関を示したことから、特殊な実施条件においては一つの方法たり得るものとした。

昭和二十七年度進学適性検査問題の検討
(主として Factor Analysis)

斎藤寛治郎

昭和二十七年度進学適性検査本検査問題について、さきに問題作成委員会が作成に際して仮定した因子を検討するために Factor Analysis を行った。

Sample として全国の受験者二七二、七六六名より Random Sampling によって四〇〇枚を抽出した。

受験者の得点によって問題種類別の相関係数を算出した。次に Good-poor Analysis によって、両群間の通過率に五%の危険率で差のない Item 及び各 Item の通過数を Standard point として二群に分ち両群の通過率の間に五の危険率で差のない Item を除多して再採点

を施し問題種別間の相関係数を算した。更に各問題種類別内部に於けるItemについて無相関検定を行い関係のないItemを除外し再採点を施して問題種類別の相関係数を算出した。

以上によって算出した相関係数を基にFactor Analysisを行った。

文章理解が第一因子と考えられるが、各問題種類とも第一因子に集っている。推理は第二因子と考こてもよいが積極的ではない。

情意徴標予診法（第三報告）

佐伯克

先の第一報（予診術式）、第二報（標準化検定）、ついで、変調徴標としての高度変調徴標数と軽度変調標数の組合せの特色とその出現頻度の列位を検討し、高度変調徴標も軽度変調徴標も正比例して増加すること並びにその列位も相関が極めて高く、出現の仕方も全く相似している点を認めて報告した。又、固有徴標と反対徴標の出現様態を変調者群と無変調者群に別けて検討し、この二徴標は変調の有無に比較的関係少く発現し、一方の増加は他方の減少を来す傾向があることを認めて報告した。用いた資料は本予診法標準化の被検者四九一八名であった。

診断テストとしてのロールシャッハ法（第一報告）

——精神分裂症における——

村上英治

精神分裂症患者二六例（内男子一六例女子一〇例）にロールシャッハ・テストを施行してKlopferの方法に準拠して解釈した結果を、従来の研究——就中Beck, Lickers Ovsiankins, Klopfer and Kelleyらの研究——と比較してロールシャッハ・テストが果して診断テストとして有用であるか否かを検討した。

ロールシャッハ法によって判定される分裂症の徴候ともみなされるものは①把握型②全体反応③作話反応④混合反応⑤細部反応⑥運動反応⑦色彩反応⑧体験型⑨色彩命名⑩良形体反応⑪平凡反応⑫質の変化⑬阻止⑭独自反応⑮動物反応⑯陰影反応⑰定位反応⑱個人的抽象的反応⑲固執傾向⑳カードの記述、といった二〇の項目のそれぞれにおける存比及び量的関係であって、私の検討した結果によれば必ずしもそのプロセスにおいて、単一な典型的なシンプトームと思われるものが存在するとはいえない。しかしながら分裂症患者が日常生活と接触することの欠除の結果として粗雑な全体反応や作話反応が示されたり、あるいは日常生活に無意味な些細なものに対する認識の強さとして細部反応に気をとられたりする。D%とP%との逆化も又之を示すものであろうし、M反応の欠除は彼らの分化した構成的な内的生活の欠除に応じ、妄想型では幻覚に対応して反応の高さが見られたりする。更に又之らの像は通常学令前児童に多く見出されるものと一致する点が多く、この点からも分裂症患者の退行現象が見られると云ってよいであろう。

かくしてロールシャッハ・テストは分裂症なる症候群についての問題の解決に役立ちうると考えられるのであるが、実際にそれぞれのクリニークにおいてより有用ならしめ、更に精神衛生の諸領域において早期診断や、初期の人格損傷の発見の助けとして適用されうるためには今後の周到な研究成果をまたねばならない。

マックロイ一般運動素質検査の信頼性

人事院が行っている警察官採用試験に体力検査として

鈴木秀夫

マックロイ教授の一般運動素質検査を改訂したものを用いている。今その結果のうち、第一回から第三回採用試験（X_{13} X_{14} X_{15} と略称する）まで三回の試験を連続受験した者（連続受験者という。これに対し各試験において抽出した標本を一般受験者という。）二九七名について検査の信頼性ないし練習効果を検討する。

A、(1)検査の実施（略）

(2)分析方法

この検査を構成するサージェント・ジャンプ（S・J）バピー・テスト（B・T）メスニー・テスト（M・T）およびこれから算出する一般運動素質点（G・MC—但しマックロイの公式の末尾の二〇二はひかずにそのまゝ用いる）について、連続、一般各受験者の試験別平均および標準差を計算し各平均間の差を検定し、又連続受験者について X_{14}—X_{15} 間の相関係数を算出した。

B、分析結果

(1)連続受験者について

(イ)各検査の平均は X_{13} X_{14} X_{15} と上昇している。

(ロ)上における上昇率は回を重ねるに従い減少する。

(ハ)各平均間の差は検定の結果すべて有意である。（γ=1%—5% 以上同じ）

(ニ)標準偏差は小さくなる傾向にある。

(2)一般受験者について　平均はM・Tを除いて上昇しており、かつその間の差は有意である。

(3)両者の平均の比較

(イ) X_{13} ではB・Tを除いて一般の方が高い。このうちS・Jの平均間の差は有意である。

(ロ) X_{14} X_{15} では各検査とも連続受験者の方が高く、S・Jを除いてその間の差は有意である。

(ハ)各検査とも平均の上昇率は連続受験者の方がいちじるしい。

(4)信頼係数＝緩相関係数（X_{14}—X_{15}：連続受験者）

S.J.…70 B.T.…49 M.T.…61 G.M.C.S…70

C、分析結果についての考察

(1)各検査とも広い意味の練習効果を認める。たゞし回を重ねるに従いその効果は前回より減少するもの(と推定できる。

(2)信頼性は各検査ともかなり高い。

(3)個々の構成検査についてみるより各検査をまとめた場合の方が検査の性質(例えば妥当性、信頼性等)はよくなる。

音楽に対する態度の測定(第二報告)

玉岡　忍

五月の日本心理学会が報告したものの比較研究である。即ち、以前は都市としての共立女学園の中学、高校大学の女子学生に対する調査であったが、この度は地方のものとして、栃木県のある商業高等学校の男女生合計五五七名に対して行った。

第一の音楽をきくタイプの傾向の調査では、全く以前のものと同じで感情型が第一、でそれに次いで動作型、幻想型、感覚型、論理型という順になった。

第二のラジオ音楽番組の好きなものとしては、音楽の泉、なつかしのメロディー、世界の音楽、などがやはり多く、この点でも以前のものと余り差がない。

第三の好きな作曲家は、男子はベートーヴェン、女子はシューベルトという結果が出、これも、私の前の発表と変りない。又滝廉太郎が全体を通じて断然多く、これに次いで山田耕　が多くなっている。全体から見て、共立の場合よりも日本の作曲家が多く選ばれていた。

第四の好きな曲では荒城の月や花が多く、共立の場合のようにシンフォニーや、コンチェルトのような大曲は余り選ばれていない。又全体を通じて、歌曲が非常に多く、その中に、歌謡曲、流行歌、映画主題歌などが多く出ている点、それが又男子に多い点などは以前の調査とかなり異なるところである。

改訂ストロング職業の興味検査法による一スケールの発表(一)

児玉　省

職業興味は㈠社会的条件、例えば経済界の事情、世人の職業評価など。㈡年齢的発達の条件。㈢各種職業についての知識と経験の有無。潜在せる技能の発現などによって、人生行路の途上変化してゆく可能性があるが、これらの点を考慮に入れて、既に出来上った人達、各職業分野に於て前述のような変化を経過しそして満足なる安定の地点に到達した人達の興味を分析して作製せられたのがストロング式興味検査である。かっこの検査は興味を単に職業に直接関連ある面に限定せず被験者の生活の殆んど凡ゆる分野に亘って検討し、性格の全面的な問題としている点が第二の特徴である。

スケールの作製法は、テストの各項目に対する一般人の平均反応数と、前述のような各職種に於ける専門家群の平均反応数の差を求めて、各項目に対する反応の職業種類に対して持つウエイトを決定することによって行われる。ストロングの検査では、第一部職業項目、第二学科目、第三娯楽、第四活動種類、第五人の性質、第六活動種類の選択順位、第七二項目間の項目の比較、の七部都合四百項目から成っているが、筆者は三年前からの三回の改訂で、前述の第七部二項目間の項目の比較をけずり、且つ全面部になかの項目を改訂して、全部で七部三百六〇項目のテストに組織した。

一般人としては十五才から五十才以上までを、十五才―二十才、二十一才―二十五才、二十六才―三十五才、三十五才―五十才、五十才以上の五年齢段階に分けて約千五百名の男女を大小都市に於て選んで、その各項目に対する平均反応を求めた。そしてこの度発表するスケールは、機械工のスケールであるが、その対象は東京はじめ大阪、九州、北海道各地の機械工中優秀なる者及びメカニカル・エンジニアーを合せて四百名以上のものの反応の平均を求め、一般人の平均反応との間の差に基いて各項目のウエイトを出し、更にそのウエイトに基いて右の優秀工の一人一人のスコアを計算してその平均値と、標準偏差からγを計算した。この平均値とγで表わしたものが、スケールになるものである。(表略す)

職務分析によるテスト作成の一試案

沢本正巳

一定の職業を対象にテストを作成する場合、まず問題になるのは、測定しようとするものを確実に測定しているかどうかということである。この点を解決し、客観的基準を得るために職務分析を行った。

Ⅰ　職務分析

職務分析の対象としてせん孔業務を選び、分析方法として完璧を期すべく1、監督者の意見、2、実施観察、3、職級明細書の三方法によった。

Ⅱ　問題内容

職務分析の結果を個人的特性に置換えてテストを作成したが、それは検査イ、数字照合、検査ロ、運動注意、検査ハ、運動協応、検査ニ、追随注意の五つのサブテストから構成されている。

Ⅲ　実　施

テストは郵政省せん孔女子職員一〇四名(一五才―二七才)のものに実施した。

Ⅳ　結果分析

一、年齢別得点平均

年齢別に得点分布をみると、各サブテストを通じて一九才のものが最もよく、二一才以後は悪く、最高点

でも一五、一六才の平均点より低いものがある。

二、内部相関

大部分の内部相関は概して低く、テスト全体と各サブテストとの相関は高くなっている。これが意味するところのものは、各サブテストが独自の性質を測定しつつしかもせん孔に要する能力を各方面から評価しようとしているということに外ならない。

三、因子分析

この表からテスト全体の因子負荷量をみると、第一因子（スピードあるいはそれに類似したもの）は〇・四五七、第二因子（数字の照合）は〇・四一二、第三因子（協応、注意力）は〇・二〇六、第四因子は〇・一六八である。

因子負荷量 h^2

因子	I	II	III	IV	回転後	回転前	差
検査イ	0.328	0.706	0.130	0.187	0.658	0.658	0
ロ	0.420	0.332	0.336	0.373	0.538	0.537	0.001
ハ	0.529	0.572	0	0	0.607	0.607	0
ニ	0.518	0	0.201	0.088	0.315	0.317	− 0.002
ホ	0.489	0.349	0.264	0.288	0.509	0.510	− 0.001

V テストについての考察

実施対象が現職公務員である関係上、業務の成績として評価されているある資料とテストとを比較してみたが、その結果〇・五七（ピアソン相関係数）という数値を得た。

このテストによって大体有効な結果を得たのであるが他の業務にも行い、なお一層研究したいと思う。

青年のパーソナリティの評価について

古籏安好

ゲスフウテストによって青年（中学校生徒）の評価したパーソナリティ諸特性は、どのような Constellation をなすかを調査し、それによってさらに、青年が、その集団内で、Status を維持するという課題に含まれる要因を考察しようとする。

ゲスフウテストは、交際・しやれ・成功・判断・人気・気分・自信・親切・身なり・尊敬・協力・指導・責任・寛容・独立・信用・活動・工夫・明朗・容姿の二十項目から成り、各項目は、二つの面すなわち消極と積極の二つの極端を示すものをもつので、全部で四十の設問から出来ている。

このテストによって、中学校生徒百人に、六ヵ月後再テストした場合、彼らの評価の相関係数は、.704 で、P.E.r=.011 である。

中学一年と三年、八一一名に実施した結果は、各項目間の相関係数を算出し、学年・性別の四つの表にまとめた。この表から、いわゆる Cluster method によって、特性のクラスターを考察した。この布置ないしクラスター1の図は、学年と性によって、どの特性が、クラスターをなすか、またはそれぞれのクラスターが他のそれとどう関係するかを示している。

しかしながら、これらの考察は、結局、中学校生徒が、かれらの集団内での身分を維持する課題に含まれる要因を明らかにする上に重要な意義があるものと思う。

この要因は、およそ次のような三つの面をもつものと考察される。

1　判断力・成功性、これは社会的機能に関連し、全体としての集団活動を能率的にするという性格をおびている。

2　親切・責任ある態度、これは集団内の仲間関係ないし社会的構造を規定する要因。

3　情緒的快活性と身体的活動性、これは性の役割に多く関連し、女の子では「静かに、落ち着いている」という性質が一層期待されている。

青年は、上の三つの一つ或いはそれ以上の面の特性を身につけることによって、集団内で「地位」を占め、あるいは「威信」Prestige を確保するのであると考えられる。

教師の自己評価についての一考察

池上喜八郎

（一）本研究の目的

教師の自己評価を現実化し、より一層有効適切ならしめんがため、こゝに先づその改善着意すべき問題の所在を明かにしようとするところに本研究の狙いがある。

（二）調査方法

日本教育大学協会「成長と発達」の研究手引及び、同じく「青年心理」の研究手引所載の教師の自己評価を一応の課題とし、被験者として新潟県中頸城郡及び西頸城郡の一部の小、中学校教師に応答せしむ。

（三）調査の結果

採点結果としての各項目の得点の傾向は、品川不二郎氏の研究結果とほゞ一致す。（第一図、第二図参照）

併し各項目夫々についての得点の分布状況及び教師の自己評価に際しての態度の差異については問題がある。（各項目の内容そのものゝ妥当性云々には触れない）（第四図参照）

評価方法上に於いて特に注意し、改善努力すべき点として次の四つを掲げる。

1、自己評価の限定に関する問題

2、評価項目の再構成に関する問題
3、評価の規準の現実化に関する問題
4、採点配類段階づけ等に関する問題

(四) 結　び

自己評価は飽く迄教師の自己指導に即するべく現実的要求を満すよう方向づけらるべきである。自己の現実的限定を課題とし、これを克服するところに人間の進歩発展がある。(第一、二、三図は省略)

第四図　教師の自己評価に対する意見

態度＼教師		中	小	計
無批判的態度		9	10	19
否定的態度		2	2	4
肯定的態度	消極的肯定	17	18	35
	積極的肯定 一部訂正(断片的)	4	13	17
	積極的肯定 改善意見	8	10	18
	計	29	41	70
計		40	53	93

交友テストの試み

田中熊次郎

1、研究目的

児童青年は、彼の所属するグループの中で、そのグループの成員の力の均衡不均衡の度によって、行動が規定されている。均衡の場であれば、安定であり、学習のための潜在エネルギーも蓄積される。不均衡の場であれば、これに反する。

このような、グループとしての学級の場は Friend-sociogran, Companion-sociogram, Play-sociogram などのテクニックによって解明されて来たのであるが、今回、私は「交友テスト」のテクニックを試みてみたのである。このテストによって、友人関係を数的に客観的に理解し、学級社会の心理学的集団気候及び成員個人の社会的人気を診断し評価しようとするのである。

(四)、方　法

問題は、一ばん仲のよい友達は五、普通の友達は四、あまり関係のない人は三、よく知らない人は二、仲の悪い人は一と、それぞれ学級姓名表に記入することとなっている。この試みは、小学校四年以上に実施し得るようである。

3、予備研究の結果とその考察

予備研究の結果を、男→男、男→女、女→男、女→女などのグループについて整理してみると、およそ次の如くであった。

(1) Same sex からの評価と Opposite sex からの評価の相関は、一二の例外を除くと、小学校中学校何れのクラスについてみても、かなりに高い。即ち、この結果から、このテストの信頼度が知られよう。

(2) すべてのクラスにおいて、例外なく、Same sex score ＞ Opposite sex score である。その得点平均の差は分布の検定によれば、〇・五%又は〇・一%以下の危険率でしかない。

(3) 男→女の場合と、女→男の場合とを比較するに、小学校では殆ど前者が低くなっているに拘わらず、中学校では必ずしも然りではない。

(4) 得点平均の低い場合に、それは問題のクラスであり問題の児童或は問題の青年であるといえよう。得点平均の高い場合には、これに反することがいえよう。

(5) このテストの標準化については将来の研究に属するが、T-scose に換算すれば、他の知能検査、学力検査などとの関連において、診断及び評価が可能となろう。

採用時面接における評定の信頼性

羽場　究

Ⅰ　問　題

標題について、次の二点より検討した。

1、評定者間における評定の一致度。
2、総合評定と一致度との関係。

Ⅱ　方　法

1、被検者

ある官職への受験者約一八〇〇名(満一八才～三〇才の新制高校卒業程度以上の学力を有し、第一次試験に合格した男子)

2、面接者

対象官職の課長級で、その官職についての資格要件等熟知せるもの三名を一組とする。

3、評定尺度および評定法

五段階式図式評定尺度による評定票(評定項目は、1、容姿態度、2、表現力、3、判断力、4、積極性5、堅実性、および判定の六項目)により、面接者自身の個人的偏見に左右されないように注意することはもちろん、筆記試験の成績等きりはなして、1～5の各項目についての各段階のどこかに評定した。

4、結果の整理法

試験地を層とし、層別無作為抽出法により、二〇〇名を抽出し、次の操作によった、各受験者について三名の面接者の評点をもとめ、さらに、その平均および平均偏差をもとめ、その大小によって一致度をみた。

Ⅲ　結　果

1、評定者間における評定の一致度は、偏差〇・〇〇

で最高、〇・八四で最低、偏差の平均は〇・二二であり、標準偏差は〇・一三であった。従って全般的に三名の面接者による評定は⅕段階の誤差をもって信頼しうるといえる。（「性格と社会性の検査」評定尺度の信頼性（牛島）参照）

2、総合評定（各面接者の判定の総合）と一致度との間には逆の関係がみられた、すなわち、一致度は相対的に高く評価されたものにおいて低く、低く評価されたものにおいて高いという結果がえられた。同じ判定のうちでも合格者の方が不合格よりも一致度が低かった。

Ⅳ　将来の問題

将来考えるべき問題として次のようなことがあげられるであろう。

1、評定者間における各評定項目の一致度

2、三名の面接者が別個に受験を評定した場合の一致度

3、信頼性の低い評定に対する処置

向性検査における他人による評定の妥当性について——第一報

松井　賚夫

1、調査目的

職員や工員を採用するに当って、申込者の向性をみることも性格を知る手掛りとして重要な意義がある場合がある。向性検査は一般に自己診断法によるが、採用試験などの場合には、自己診断法にはいろいろな面で難があり、熟練者による観察評定ということも考えられねばならない。たゞ、この場合、受験者について、極めて限られた観察しかなしえない条件下におけるこの種の評定の妥当性が問題であろう。将来、このような問題を取上げる予備的段階として、こゝでは、比較的よく知り合っている者同志間における評定の妥当性を、自己診断の結果を基準としてみようとした。

2、調査手続

旧制専門学校又は大学教育をおえて現在、かなり専門的な知識と判断力を必要とするある官職に在職中の二五才前後の七三名（内三名は女子）に対して、上野式向性検査による自己評定を行わしめ、次に、お互に最もよく知り合っている者同志間で相手を評定せしめ、このようにして得られた他人による評定の結果を、自己評定の結果と比較した。

3、結　果

a、両評定による向性指数間の相関は約・五一で、両評定の一致度はかなり高い。たゞし、他人評定の向性指数の平均は、自己評定のそれよりやゝ高く、従って、やゝ外向的に評定されている。

b、自己評定の指数に基き、内向性グループと外向性グループに分けると、他人評定における評定の外向へのかたよりは、内向性グループにおいて特にはなはだしく、外向性グループでは逆に、やゝ内向的に評定されている。

c、「これは確に自分（又は相手）の特ちようだ」としてつけられた項目の全項目に対する割合は、他人評定は自己評定よりも、やゝ少ない。

d、他人評定においてつけられた外向性項目と内向性項目間には、自己評定との一致度に関しては、何等差がみられなかった。

e、他人評定で、「これは確に相手の特ちようだ」とされた項目は、行動にあらわれ、対人関係においてみられる性質のものに多く、外部にあらわれにくく、かつ、判定の基準が相手の要求水準と関係が深い性質のものに少なかった。

精神薄弱児における重量の順序配列の能性

大脇園子

精神薄弱児の正常児との間の知能の質的な差違は思考の具体性に存すると云われている。この報告は精神薄弱児の知能の具体性を重量の順序配列の実験によって観察し、具体性から抽象への発達の過程を考察し、同時に重量の順序配列の課題が如何なる心的機能を必要とするかを検討した。V.p は宮城県立精神薄弱児収容所の精神薄弱児三二名で歴年令七才～一八才、知能年令二・四～八・〇である。実験は次の四種から成る。

〔検査Ⅰ〕重量感覚の正否の検査で三gと一五gの三cm立方の白い箱を比較させ重い方を云わせる。不能の V.p には三gと三〇gとを比較させる。全 V.p が二種の中何れかの検査に成功した。

〔検査Ⅱ〕刺戟間の差違が目に見えている時即ち大きさの差異である時三個四個及び五個の物体を大きさの順に並べさせ配列の能性を検査するを目的とする。その結果配列不能の V.p は五名、五個を正しく配列し得た者一五名であった。

〔検査Ⅲ〕では刺戟間の差違は視覚的には与えられず重さの差違に存する。かゝる関係を持つ三個四個五個の重量刺戟を重さの順に配列せしめた。その結果検査Ⅱの場合は配列に成功しながら此の検査では配列自体が不可能となった V.p が見られた。従って五個の配列を正しく完成したのは僅か八名に過ぎなかった。

〔検査Ⅳ〕も課題は大きさによる配列であるがこゝに用いた四個の刺戟は重さと同時に大きさも異る。この検査の目的は視覚的要因が重量による配列に際して妨害的に働くという条件下で重さを抽象して配列する能性の存否を検出する事である。この検査は前に四個以上の重さによる配列に成功した V.p についてのみ行った。検査

の成績は他の何れにも劣り成功した五名は何れも知能年令六・三以上で、その他は順序を全く混乱して配列し或は手続は正しいにも拘らず大きさの順に配列したのであった。

以上の結果を綜合的に考察するに、配列作業は換言せば刺戟場面の組織化であり、重量による順序配列は組織化が行われる際に重さの抽象を要求する。これはモンテソリー塔や階段を構成させた時の V.P の行動に見られた。更に大きさと重さとが共に異る物体を重量によって順序配列させる時はより高度の重さの抽象を必要とする。これらを精神薄弱児の行動に照して考察すると知能の低い程刺戟場合の組織化は困難となり思考は具体的事象に止り抽象的思考まで進み得ぬ。精神薄弱児の教育に当ってはこの点を充分考慮すべきであろう。

妄想形成に関する一事例研究

田辺子男
三木清子

問題 こゝで妄想とは、精神病者の言語表現における通達不可能な内容をさして云う。こゝで問題にしていることは、自発的に手紙をよく書くが、その内容が通達不可能な妄想様である一人の精神分裂病患者に、社会的刺戟を与え、他に訴える必要を高めた際に、その言語表現の内容の通達の度が、果して増すであろうか。即ち、妄想様の内容に何らか変化がみられないであろうかをみようと試みたのである。

被験者。精神分被病の四十二歳の女。自発的によく手紙をかいてよこすが、その形式は支離滅裂であり、内容は妄想様で意味がまるで通じない。性格は怒り易く、攻撃的言辞が多い。

実験手つゞき 刺戟としては、一人のきまつた看護婦に毎日テストをさせにゆかせた。この間のテストされることを怒り、之をこばもうとし、ことわりの手紙をかくといつた時の手紙と、その他の時の手紙とを比較し、考察する。

結果 通達度は、夫々の手紙において、最も多く現われる同一単語の頻数によつてはかれることが、予備的分析によつてみられた。即ち、最多単語の頻数の少い時には、通達度が高い事がみられる。

ことわりの手紙をかくと云つた時と、その他の時の手紙の最多同一単語の頻数を比較すると、ことわりの手紙をかくと云つた時の方が、最多同一単語の頻数が少い。このことは、通達度が他に比し高く、妄想度が減じていることを現わしている。

このことから次のことが云える。

この精神異常者において社会的刺戟の度を強め、これを受容する行動からみて、他に訴える必要度を増しているであろうと推察される事態においてかゝれた手紙という言語表現においては、他の時に比しその手紙において最も多く現れる単語の頻数は、他の手紙より低下する。この事は、この精神異常者において、通達の必要度を増しているであろうと推察される事態において他の時より言語表現における内容の通達度を増し、即ち、妄想の度を減ずることをあらわしている。

環境の精神症状に及す影響——内因性精神病、特に躁鬱病を中心としての考察

青木義治

精神障碍就中精神症状が環境或は社会条件によつて如何様に影響するか、その限界範囲を検討するため、特殊条件として、戦時環境を取り上げ、この環境裡に於ける特殊集団である軍隊集団を選定し、かかる集団に発現した躁鬱病（M・D・Iと略す）八三例を中心に考察し、更に私が以前調査した戦時精神分裂病（Sと略す）並にそれら精神障碍の一般平時の場合とを比較検討した。

S（五二・七%）と同様にM・D・Iの六二・六%半数以上は入隊前よりの発病者であり、環境条件の一つと考えられる入隊後の発病迄の期間等には両者の間に差違はなく、入隊後発病では外地での発病が比較的多かつた。直接誘因となつた精神的及び身体的誘因もM・D・Iでは平時と大差なく、むしろSが平時に比して身体的誘因が多い。幻覚及び妄想内容では戦時環境反映を示したものは両者共略半数で、幻覚発現率も平時との差はないが、M・D・Iの妄想発現率は平時に比して多い。平時の場合と同様に躁状態では誇大妄想、鬱状態には罪業、心気、関係妄想等が多く、環境反映を示した妄想内容にはSの場合と全く同様で、戦時殊に軍規にしばられた軍隊生活環境に直接反映した内容が示された。

両者共自殺企図は平時より多く、特に鬱状態は七一・〇%にも認められたことは注目され、罪業妄想に関連性をもつ軍規違反の罪に対する解決乃至は逃避方法として自殺が選ばれた。

青年を自殺に追込む葛藤場面の臨床的考察

内山喜久雄

葛藤場面殊に情緒的に困難な事態に直面して、人は何等かの形でこれを克服乃至回避しようとするが、完全且つ永久にこれから逃避しようとする行動が自殺である。精神分裂病患者のそれのような不可解な自殺行為は除き、一般には精粗の別はあるが、ある程度まで自殺の原因を跡づけることはできよう。第一例は Depression を中核としたもので、その後、短期間に父、死亡、兄、重症盲腸炎、姉、肋膜炎、母、脳溢血と相次で不幸を体験し、遂に自殺を企てたものである。この二十三才の男子

青年の自殺の原因として、抑鬱症状をあげることは当然であるが、前述の事情がこの場面逃避としての自殺にさらに拍車をかけたことは否認できない。

第二例は十九才の女子青年の場合で、青年期的な厭世観をはつきり示している。厭世の原因は「不潔、猥雑、且つ自己本位な」人間世界への反抗、嫌悪であり、第二に父や姉の去つた後の家を維持すべき精神的責任感、重圧感である。誇張された青年期的な主観的な観方よりすれば、人生は住むに堪え難い世界であり、重く肩に負いかぶさるいやな荷物と見えたのであろう。本人の叙述によれば人間世界は汚らわしい。少女小説の世界のみが美しい。美しい心情をもつた人がこの世にありとすればそれは少女小説作家のみである」といつている。われわれはこゝに情緒的発達の遅滞を認めざるを得ない。これらの要因のみで自殺が起ると断定することには問題があるが、完全逃避をはかる重要な要件となることは充分考えられる。

2) 斯る異常曲線傾向の持続性に関する疑義は我々の追試の結果、常態曲線の持続する如く異常な曲線特徴も多少の変動はあつても曲線全体としての本質的傾向は持続するものである事がわかつた。

3) これらの曲線傾向の持続は精神分裂病に関する限り Lobotomy, Lobectomy, Transorbital-lobotomy 等のパースナリティの構成に或る程度の影響を与える目的でなされる脳外科的手術によつても本質的傾向を変えずに、同一傾向を持続するものと考えられる。

4) 辻岡氏の因子分析法による判定法を試みたところ二例二一回の data に関しては略々その判定法の妥当性を経験的に裏付ける事が出来たと考える。

各種精神病者の不完全な寛解状態に比較的長期にわたつて行つたクレペリン内田曲線

西尾忠介
秋山誠一郎

我々は作業療法に応ずる様になつた各種精神病者に対し一ヵ月間隔で本検査を実施しているが、その回数が五回以上になつたものを執りあげて、其の間の経過に従つて主として曲線型を考察した。そのうち精神分裂病及び進行麻痺について述べた。

それを要約すれば、

1) 内田氏の所謂〃早発性痴呆〃並びに〃麻痺性痴呆〃の曲線と云われるものを追試検討した結果内田氏の曲線を裏付ける事が出来た。

記憶層の仮説（その一）——電気ショック法による研究——

新井康祐
小保内虎夫

電気ショックは、精神病に対する治療方法として用いられるものであって、治療成績に関する報告は多い、かゝる治療の目的以外、これによって起る心理的機能に関する研究も併せて行われている。このような研究は、治療の効果を予見したり、或は評価したりすることに対して、客観的な基準を確立する上に役立つことが多い。

しかし、何分にも研究の日が浅いため、実験方法や、実験条件の不備もあって、結果は、まだ基礎的な Mechianism を理解するまでには到達していない。われわれは、これらの結果を吟味しつつ、電気ショックによっておこる記憶障碍は如何なるものであるかを調べた。この場合問題となるのは、記憶障碍が、記憶痕跡の定着の破壊によるものか、それとも、もっと別な Mechiansm によるかということである。今回は、前者の問題即ち、記憶痕跡の破壊による説明が、はたして妥当かどうかを吟味することを中心問題とした。

電気ショックは記憶痕跡を破壊するという考え方に立っているのは、Flescher, Zubin, Barrera, Duncan, Riess, Radnick 等であり、これに対し、記憶痕跡を破壊しないという立場に立っているのは Mayer, Gross, Hemphill, Worchel 等である。

われわれは有関係対語試験（五系列）および無意味綴一〇系列について予想法で実験を行った。

① 実験方法　完全学習をして、後、電気ショックを施行し、ショック後、時間の経過と共に再生率を調べた。この場合、学習と電気ショックとの間隔時間を種々変えてみた。

② 結果は次の通りである。（数字は%）

第一表　有関係対語試験

学習とショックの間隔時間 ＼ ショック後の経過時間	15 分	30 分	45 分	60 分
学習直後	20	73.3	93.3	100
30 分	20	87	100	100
40 分	26.6	73.3	100	100
2 時間半	30	90	100	100

第二表　無意味綴10系列（数字は%）

学習とショックの間隔時間 ＼ ショック後の経過時間	15 分	30 分	45 分	60 分
1 時間	30	80	100	100

この結果を見ると、六〇分後においては一〇〇%の再生率を示している。もし記憶痕跡が破壊されたものならば、ショック以後、記憶が全然おこらない筈である。実験によれば、ある時間経てば記憶が恢復するのであるから、痕跡が破壊されたとは考えるわけにはいかない。また学習直後電気ショックを施行した場合も再生率からいえば、他の場合と異ならないのであるから、記憶が痕跡化するのに Condensation period が必要であるという Zubin 等の仮説は承認出来まい。

従って、ショック後一時間以内において完全に再生出来ないのは、記憶痕跡が破壊されたためではなく、記憶の基礎となる integrated nerve system が電気ショックによって攪はんを受けるためと思われる。

神経質者の社会適応

渡辺徹
安藤公平
大村政男

〔問題〕 一般に〃神経質な〃という形容のもとにグルーピングされる一群のひとたちは、おおくの場合 Maladjusted の烙印をおされている。われわれは神経質者についての一連の研究において、おもに Welladjusted と Maladjusted との二群のひとたちの統計的処理により、その代表値の差の検定でかれらの社会行動への反映をあきらかにしてきた。この小論文はそれらの補助的なものとして作成されたものである。まずわれわれが問題としたのは次の3項目である。

1、神経質検査の評価段階—すなわちAからEにいたる五段階に包含されるひとびとは、はたして違って評価されるほどの差異を持っているであろうか?

2、二神経質傾向のもっとも強いE群のひとびとはもとより、他の段階に属するひとびとのどのくらいが Maladjusted しているのであろうか?

3、神経質者は社会生活のどんな面で特におおく Maladjusted するであろうか?

〔方法〕 この問題の研究のために、われわれは日本大学心理学研究室で構成し標準化した二つの神経質検査（形式O、形式S）を用い、男子三五二名・女子六五九名（主として学生）を検査した。さらに同一の被検者に近隣・家庭・友人・学校の四関係についての一八項目の質問についても調査した。その一八項目の質問のおもなものは次の通である。

2、現在のところに住みたくない。

4、家で家族や使用人とよく衝突する。

9、友だちと論争したり、口げんかすることがおおい。

19、勉強しようと思ってもながつづきしない。

これらの質問に対する応答と神経質検査のAからEにいたる評価の五段階と対応させたのである。もし神経質と質問に反映した社会行動とが直接な因果関係があるとすれば、E・D・C・B・Aの順に Maladjusted のひとたちの人数が低下し、その傾向はJ型曲線をとるはずである。

〔結果〕 1、近隣・家庭・友人・学校の四関係と検査の五段階との対応はほとんどJ型曲線をたどった。2、検査の五段階によって評価されたひとたちの間には、たしかに違って評価されるほどの差がある。3、三神経質傾向の強いものは他と比較して Maladjusted の機会をおおく持っている。その機会はD・C・B・Aと神経質傾向が低下するに従って少くなる。4、被検者が学生であったため Maladjusted の場面は友人・学校が顕著である。

カウンセリングの問題点
——実践的展開を中心として——

井坂行男

一、カウンセリングを、「自分個人の力によってのみでは解決に困難を感ずる問題を持つ者（カウンセリー）に対して、その教養や経験からしてその問題の解決に助力を与え得る能力を持つ者（カウンセラー）が、一対一の面接による話し合い（相談・助言）によって、問題解決に助力する過程である。」と解する時、教育においてもカウンセリングは重要な機能を持っている。特に教育におけるカウンセリングの特質は、カウンセリーとしての生徒に対して、問題解決のための判断、計画、実践等の能力の発達をはからなければならない点にある。

二、教育におけるカウンセリングは、理論的に純粋な、基本的形態を中心としながらも、種々の過渡的、移行的、現実的、応用的形態をとらなければならぬことが多い。その形態を決定する最も重要な要素の一つは、生徒の持つカウンセリングのニードである。それは、調査、質問紙、観察、記録の分析、本人又は関係者からの申出等種々の方法によって把えられる。一例として、昭和二十七年二月に茨城県下で行った中学校十八、生徒男女八、五六九名、高等学校五、生徒男・女三、九四二名の調査から得た問題を分析し、学校におけるカウンセリングの範囲、カウンセラーの任務等を考察する。なお、カウンセラーを設置した場合と設置していない場合における生徒のカウンセリング・ニードの現われ方、教師と生徒とのカウンセリング関係の相違を調査に基づいて考えてみる。

三、三昭和二十六年度文部省主催中等教育研究集会、〔全国八地区、「生徒指導の技術（カウンセリング）」部会参加者三八〇名〕の協同研究の結果、文部省の調査、発表者の調査並びに発表者に対する教師からの訴

え、相談等を資料として、わが国におけるカウンセリングの当面している問題——例えば、カウンセラーとしての教師の任務、学校において行うカウンセリングの限界カウンセラーの資質と訓練、養成カウンセラーと他の職員との関係、カウンセリングと訓育との関係等の問題の分析と解決方法を研究する。

四、以上に基づいてわが国におけるカウンセラー設置状況と今後の発展について必要な方途を検討する。

諸種の検査の結果による人格の綜合的診断

大脇義一

人格の心理学的方法による診断は如何に巧妙精良なる技術であるにしろ、唯だ一つの検査法だけによっては到底その目的を十分には達せられないのであって、幾つかの方法の組合せによって始めてある程度の比較的恒常的な構造、或は反応可能性の全貌を捕え得るであろう。かくして始めてある程度、将来の行動についての予言の可能性が生れるのであり、かくして始めて検査法の臨床心理学的意義が獲得される。

この問題を考察する一つの資料として昨年、東北大学の研究室員の共同研究として行った東北少年院の少年一五五人の中から特に特徴的な少年六人を選び出して考察した。即ちこれ等各自についての会談法（情意不安定性検査）、行動評定法（クレペリン内田検査及びミュラー・リーエル大脇検査）及びプロジェクティブ・メソット（T・A・T）の結果を綜合し、各少年の人格の基本的特徴の面と、各検査法の捕えた側面とを明かにした。そして更に猶お今後研究の要望されなければならない面、又は層が存在することを指摘した。それは基本欲求、興味、習慣、態度などの夫々の面の構造と、それらと、先に捕捉し得た面との全体的な固有な組織構造にまで進められなければならない。なお終りにそれに因んで、国際心理技術学会第九回大会に於いて発表された幾つかの新方法について一言した。

横須賀市に於ける児童・生徒の街娼に対する理解・態度の実態調査（中間報告）

村山秀雄

横須賀市は終戦と共に、大きな変革をとげ、一朝にして平和産業港湾都市となり、米海軍が進駐するに及んで、徐々にまたもとの軍港都市に逆転するに至った。こゝに於いて、軍特に海軍につながりをもつ売笑婦（特に街娼）が、きゆう然と登場したのである。従来、売笑婦問題は別に社会全体の問題として取上げられる程のものではなかった。然るに新しい街娼は、俄然大きな社会問題として、市民の特に我々教育者の眼前に大きな問題として取上げられるに至ったのである。

一時、この市には、七、八千人と称せられる街娼がいた。数次の浄化によって、減少したが、それでも四、五千人は下るまいと言われている。これら街娼の行為・態度は、善良な社会風俗に対し、殊に純真な青少年に対し、悪影響を及ぼすことが考えられるのである。これらの悪影響に対し、我々は青少年を防護してやらねばならぬ。それには、先ず第一段階として、青少年が街娼に対し、どのように理解し、どのような態度をもっているかを調査せねばならぬ。そこで我々は先ず彼等の街娼に対する理解・態度の実態調査を実施したのである。

調査の結果について大略すると、解答者の大部分が否定しているので、大体健全と考えられるのであるが、いいなあと思った（肯定した）ものが、かなりの数字にのぼっているが、これは教育上重大な問題である。小学校で肯定したものの内容を見ると大体子供らしい、あまり罪のないものであるが、中には注意すべき内容のものもある。中学校で肯定したものの中にはかなり注意を要すべきものがある。街娼に対し羨望を感じたり、安易な生活を羨望したりするような態度のものが見受けられる。これらは大いに注意を要するものがあると思う。以上は内容上から見たのであるが、次にこれを発達的に見ると、街娼に対する彼等の理解・態度が発達していることが見られる。次に性的差異の点から見ると、性的行為に関するものは男性に多く、服装、容姿に関するものは女性に多い。

尚以上の外に、地域性の問題が残されて居り、又、児童・生徒の街娼の行為・態度に対して、衝動的、情緒的なもの、無意識的なものは、この調査では十分に捉え得ないと思う。それらについては、更に Case Studn 等によって、これらのものを捉えることが大切であると考えられる。以上のような深い調査の実態に基いて、教育上の対策を樹立することが、大切であると思う。紙面の都合で要をつくし得ないのは遺憾であるが、他の機会に精しく述べたいと思う。

双生児犯罪少年のケース研究（其の一）

台利夫

精神薄弱児が犯罪を行った場合、そのパーソナリティと非行の原因との関係を考える時、彼等を普通の少年院へ送るべきか否かはかなり問題がある。此処でも彼等の不適応は依然として継続し少年院送致が単に懲罰の意味しか持たないとすれば。再犯の虞れがあるからである。

これを研究する手がかりとして私は一組の一卵性双生児の非行少年を取上げた。非行は・最近の窃盗である。彼等は同一環境に育ち、常に同一の行動をとって来たが、裁判の結果、兄は少年院送致となり、弟は在宅保護観察となって今までの生活様式を続けることとなった。従っ

て今後何年間かにわたり両者の精神的発達状況を比較するならば、（此の少年に関する限りの話しではあるが）少年院に於ける教育の効果を考察することが出来るであろう。

現在把えたデータは無いが、一応の予備知識として非行に対する諸原因を探って見る。

家庭の経済状態は悪く。家族は九人。両親は教育的関心は殆ど無い。本人等はI・Q、71、68の精神薄弱である。学校に於て彼等は何等の適切な教育を施されていない。固く団結した不良グループの仲間になっていた。此等が重り合って非行が形成されたものと考えられる。

彼等の現在の精神状態について言えば、性格は殆ど一致していて、両者ともにヒステリー傾向が強い。種々の検査によってもかなりの一致が見られるから、今後の変化を見るのに適していると思われる。四月に検挙されて以後の変化には未だ見るべきものがない。

法律の心理学的考察

民法を中心として　第二報

妻倉昌太郎

民法は昭和二二年改正せられその際、親族相続の両篇は平仮名口語体に改められ且つ句読点を施されたが、総則、物権、債権の各篇は改正が少く、表現も従来のまゝの文語体片仮名書き句読点なしである。法律が読難いのは一つにはこのような形式的な理由に依ることもあると思われる。

そこで民法の前半の三篇中から六〇個の条文を選び、これを原文のまゝで大学初年級の学生に示して、「よく分る」「少し分る」「分らない」の三段階に分けて各条文を判定させた。一方、同じ六〇個の条文を口語体平仮名書きに改めかつ句読点を附して、前同様判定させ両者を比較してみた。原文を与えられた被験者は九〇名、平仮名書き口語体を与えられた被験者は七二名であった。

整理の方法は、各被験者のよく分ると判断したものに三点、「少し分る」に二点、「分らない」に一点を与えて、回答を数値に換算した。各条文毎に総計したこの点数をその条文の読みの容易度とした。（この際、両形式の検査の結果を直ちに比較出来るように被験者を同数になるよう換算したことは言うまでもない。）この両検査の結果から得た読みの容易度を比較すると、

1、大体に於て平仮名書きにした方が読み易い。

2 両検査の読みの容易度の相関は +.889 であって極めて高い。即ち読み難い条文と読易い条文は一定していて、たとえ平仮名に直してもこの関係は変らない。特に読み難いものは、法律行為、担保物権、不可分債務債権の消滅、契約総則、事務管理などである。これらが読難いのは法律用語の特殊なものがあるなどで分らなかったり、内容が専門的なので分らないことなぞがあるようである。

3、条文が長いものは読み難いと言い得るか。各条文の字数と容易度との相関を求めると −0.541 となる。従ってある程度は右のように言えると思う。

4、然らば長い条文程、これを口語体に直して句読点を施したら読易くなることはないか。原文の読みの容易度を以て平仮名書きの容易度を除した商を、平仮名書きに直すことによって得た容易化比と考え、これと原文の字数との相関を求めると +0.404 となるので、この間に低い相関を認め得る。

映画観客調査——その八

鈴木幹人
乾孝

現場反応記録と作文の分析による研究の一つであって、今回は、映画「山びこ学校」に対する中・高校生の反応をしらべた。

問題は、観客の生活感情の反映を、反応のズレのうちにうかがおうとするところにあり、綴方教育を行っている教室の生徒と然らざるものとの差を、地域・年令・性を考慮しつつ比較する目的で、多くの教育者の協力をえて材料を集めたものであるが、今回は、時間の都合上、とりあえず、一般的な傾向のみを報告し、おって別の機会に詳報することにした。

一般に最も関心を集めたところは、遠足に全員参加するための努力、みなし子となった江一少年をたすけること、「とんこ節」をきっかけに行われる教育、文集の完成等の挿話であって、一方、殆ど関心をひかなかったのは教師たちの研究会、無着の家庭のいきさつ、人身売買の件であった。これらの傾向は、かって報告した、小学生の観劇態度に通ずるものであって、大人の世界、暗示的な表現に対する無関心、理解のうすさを示す。この点に、映画鑑賞指導のつみ上げられた群、綴方教育を意識的に実施された群のズレが予想される。

無着氏については、親しみふかさ、兄のような、友達のような点が一様に強調されているが、これは、彼ら自身の教官の親しみの不足を反映しているのでもあろうか。

貧しい都会児の場合、「田舎は楽なのかと思ったら同様に苦しい」という共感を示し、ゆとりのある層では、文中には同情・おどろきを示しつつも、たとえば、フトンの上にねたことのない子の挿話などを軽いユウモアとして受けとったらしく明るい爆笑をおこした。

この子供たちの協力ぶりに引較べて、大人の反省を求める声も散見した。単なる協力の理解を越えて、苦しみの原因を見つめ、とりのぞこうとしている点を指摘しているのは、比較的進んだ級の生徒であった。

運動素質に関する実験的研究

松井　三雄
松田　岩男
鷹野　健次

一、研究の目的

運動の習熟には大きな個人差があるが、それは環境的条件のみならず、遺伝的素質によって規定されている。

我々はさきに、運動の学習能、即ち Motor intelligence 又は Motor educability のテストの作成を試み、オゼレッキー氏のテストを参考にして、幼時の自然運動を含んだテストの研究を進めてきたが、より一層、運動の素質的因子を明にすべく、双生児に就て若干の実験を実施したので、その結果の幾つかを報告する。本研究は運動素質に関する綜合的な研究の一部である。

二、被験者

東大附属中学の一卵生双生児一二組、二卵性双生児四組であり、主として比較したものは年令の等しいEZ四組とZZ四組である。

三、研究の方法

ミラー・ドローイング、タッピング、トレイシング、握力の測定を行ったが、タッピングはタンブールを使用して記録し、打叩数のみならず、打叩の強さ及びその規則性をみるような方法をとった。

三、結果とその考察

a、ミラー・ドローイング

一〇回の結果を時間（秒）と脱逸（正確度）の二面に就て、EZの同胞間の差とZZ同胞間の差を比較すると、明にZZの差の方が大きい。四例のみで速断出来ないがかかる動作は、遺伝的素質による影響が大であるようである。

b、タッピング

打叩数では右手はEZの差の方が大であるか、又は殆んど等しいが、左手に就てはZZの差が明に大である。時間的にみた規則性は両者とも変化なく一様に漸減の傾向を示す。強さの規則性は幾分EZの方が類似度が高いようである。

利手指数（L/R）に就ても同様にEZの方がやや類似度が高い。

c、トレイシング

作業が余り簡単すぎた為に、他の各種の要因の影響が入って、手先の確度（Steadiness）を精細に表わし得なかったと思われる点があるが、ややEZの類似度の方がZZの類似度よりも大であると思われる。各種の運動には、遺伝的素質の大きく影響するものと、余り大きく影響しないものがあるようである。今後更に Big muscle activities に就ても研究を進めてゆく方針である。

色の明視について

（明度差と明視度の関係）

細野　尚志
木村　俊夫

研究目的　図 Figur と地 Grund との明度差と、その Figur の明視度とが如何なる関係にあるかを、その Figur の明視距離によって実験的に測定し解明する。

研究方法

刺戟　色彩研究所作成の無彩色明度段階（日本化学視格0502）一一段階色紙を用いて、Figur と Grund との各明度の異なるものを表一の如く組合せたもの

方形紙（26mm²）を Grund とし、その中央にランドルト環（直径 8mm, 巾 2mm, 切口径 2mm）を貼り、これを黒ラシャ紙（明度約一一）の上に提示する。（表略す）

実験場　色研研究室（明室）

実験条件　照明は標準C光源（色温度6500K）で試料面の照度 250Lux とする。

明順応した眼で観測する。

観測者　男四名、女四名、計八名。

観測方法　刺戟を壁面に提示し、標準C光源で照明したものを、不明視距離より漸近し、ランドルト環の切口が明視可能と認められる距離を決定する。

法則1　地と図との明度差が大なる程、明視距離は大である。

法則2　明視距離は地と図の反射率の差とよりも、明度段階の差とよりよく併行する。

法則3　一般に明度差が等しい時、地より図の明るい方が、地より図の暗い方より明視距離が大である。（但し地と図の明度が共に一〇～一三の時は、上の関係が逆転する）

法則4　明度差が等しい場合、地及び図の明度如何により明視距離は必ずしも等しくない。

系一　地より図の方が明るい場合、地と図の明度の和が大なるもの程、明視距離大である。

系二　地より図の方が暗い場合、明度差一～三に於ては、地と図の明度の和が大なるもの程、明視距離大であるが、明度差五～九に於てはこの関係が逆転する。

法則5　明度差が等しい場合、地の明度が一〇～一一附近では、地より図の明るいものの方が、地より図の暗いものの方よりも、その明視距離小である。

(※)昆虫の色覚反応に関する実験

（※）ヤマジョウヒメバイロコメツキムシ Amisodactylnssignatus
カバイロコメツキムシ Melanotas legatus

坂本　英夫

一、目的　供試昆虫の色に対する示差的反応[1]と、白色光の存否に対する反応とを実験的に知ろうとする。1)反応刺戟色を供試昆虫に於ける⊕、⊖の誘因と考える。

二、実験Ⅰ、 直径八粍長さ三〇糎の硝子管六本を、内五本は色紙をはって、黄色・緑色・赤色・紫色・黒色の着色管として用い、供試昆虫が各管を夫々通過する時間[2]を測定する。夜間一〇〇W電燈光線下。2)この場合供試昆虫の頭が全部管内に入つた時から、頭が全部管外に出る時までをその通過時間とする。

実験Ⅱ、 直径三糎長さ三〇糎の硝子管を、第一図の様に長さ五糎づつに区切って、無色の部分と、光線導入のため幅一糎の無色帯状の所を残して色紙をはり、黄色・緑色・赤色・紫色・黒色とに着色したものを用いて、真上から光線[3]を照射し、a口からb口に到るまでの供試昆虫の行動を観察する。3)夜間 100w 電燈光線。

三、結果 第一、二表と第二図参照。実験Ⅰ[4]、セスジゴミムシは、赤色を除いて無色から黒色へと、即ち明度順に通過時間が大となっている。赤色の通過時間は無色について小である。カバイロコメツキムシは[1]、赤色の通過時間が最小である。これも亦前者程明瞭でないが、赤色を除いて、黄色から黒色へと通過時間の増加傾向が見られる。4)供試昆虫は管外へ出る時、歩行運動を中止して、触角で充分空中を探知してから体を管外へ出すことが観察された。1)無色の場合は試みなかつた。

実験Ⅱ、供試昆虫はほぼ螺旋状に管内を歩行するが、赤色の部分に到ると行動を変える傾向がある。即ち稀には前と同じ行動を続けることもあるが、多くの場合は螺旋状行動を中止して、緑色と赤色との境界線を廻って、無色帯状の部分を直線的に通過する。

四、考察 実験Ⅰ・Ⅱから次のことが考えられる。供試昆虫に於ても、A、(a)、色覚が存在する。(b)、色覚に於ける示差的反応が伺われる。B、特に実験Ⅱから、光に対する一般的反射行動としての趨光性 Helio tropism が認められる。C、問題：(1)、Von Frisch (1914, 1924) がその有名な昆虫の色覚実験の結果蜜蜂は赤色盲であると結論したが、供試昆虫に於ても特に実験Ⅱから(2)、特に実験Ⅰの結果から、供試昆虫に於ける色覚の示差的反応が、明るさ Srightness に基づくものか否かは、Von Brisch やゲッチンゲンの Kühn (1927) 等の跡を追う実験を必要とするだろう。(3)、実験Ⅱ於て供試昆虫が螺旋状行動をするのは、対刺戟性[1] Menotaxis 的反応であるのか？ (4)、供試昆虫を赤色盲であると仮定すれば、その赤色廻避行動は、緑色・灰色・無色の三光因に対する、趨光性と明るさの変化に対する示差的感受性との関連的結果であるのか。

2) Kugler (1930) Ilse (1923) 等の実験によつても凡ての昆虫が赤色盲であると断言することは出来ない。その疑がある。[2]

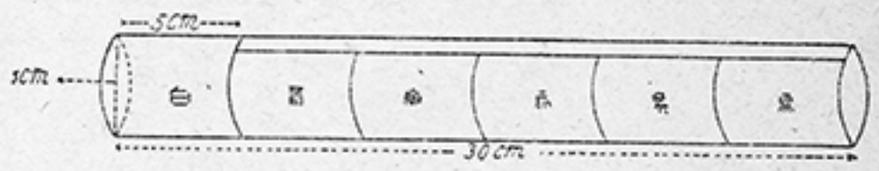
五、結語 何れにしても、供試昆

第一表　セスジゴミムシ所シ要時間表（単位秒）

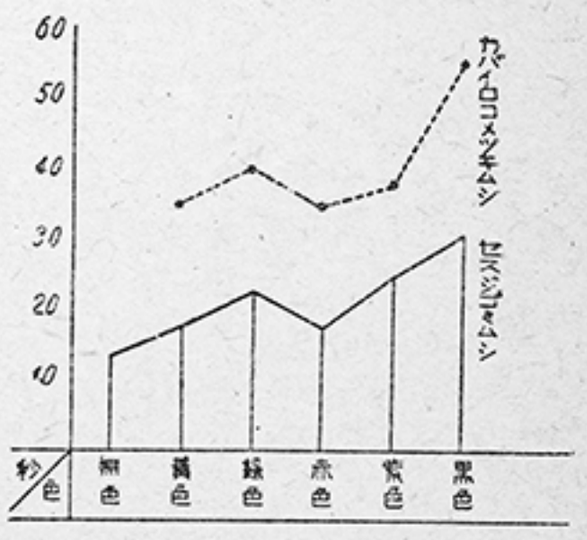
回数＼色管	無色	黄色	緑色	赤色	紫色	黒色
1	—	20.30	22.19	19.30	22.03	25.15
2	—	14.15	18.45	13.17	23.40	24.30
3	—	15.00	17.15	15.45	18.45	21.30
4	—	28.07	36.30	22.40	32.40	42.17
5	—	14.40	15.00	13.40	24.40	25.00
6	—	20.40	19.30	16.30	23.30	29.40
7	—	10.30	11.15	10.30	13.45	16.45
8	—	20.45	25.50	18.43	29.20	46.00
9	13.45	20.15	28.00	12.00	31.00	32.00
10	14.10	18.50	22.00	21.00	26.10	40.00
11	13.15	13.30	21.45	13.15	21.45	24.45
12	14.15	19.45	24.15	16.30	23.15	30.00
13	14.30	18.00	22.30	19.00	25.30	19.10
14	13.45	18.00	20.15	20.15	26.10	30.15
15	12.45	19.30	26.15	26.00	28.30	36.00
16	14.15	22.30	24.45	18.30	26.15	32.20
17	12.00	15.30	25.00	15.30	28.45	29.30
18	10.30	15.15	21.45	20.30	22.45	27.30
計	131.50	322.59	400.14	310.25	445.08	540.27
平均	13.15	17.92	22.23	17.24	24.73	30.02

第二表　カバイロコメツキムシ所要時間表（単位秒）

回数＼色管	無色	黄色	緑色	赤色	紫色	黒色
1	—	44.35	41.32	45.07	52.17	61.20
2	—	37.16	49.29	43.15	45.45	51.08
3	—	45.00	40.30	45.09	53.05	47.40
4	—	52.30	51.48	41.00	40.30	49.37
5	—	25.07	31.40	33.40	29.00	43.40
6	—	16.20	23.00	23.25	26.00	97.10
7	—	35.00	46.08	22.45	24.05	27.15
8	—	25.30	30.30	22.40	29.38	52.00
9	—	32.15	43.40	34.00	36.08	60.00
計	—	312.33	356.57	309.81	335.48	488.70
平均	—	34.78	39.62	34.42	37.28	54.41



第　1　図



第2図　第1表第2表平均グラフ

虫の色覚に於て、赤色はマイナスの誘因と思われる。1）光源に対して一定の角度を保つて運動する。

参考文献 A. D. Imms ; Recent Advances in Entomology, 1937. 立花祐雄；色彩の心理、昭和一一年。

向性検査より見たる性格変化

岡　村　助　男

目的　一般に採用時面接において、性格判断がおこなわれる。この場合、その性格判断が信頼性の高いものであるか否かは重要な問題となる、この点を明らかにするため、ある一定期間をおいて同一人に向性検査を二回実施し、この二回の検査結果を比較検討し、環境その他の条件の下で性格がいかに変化するかを見る。

対称　以上の目的で、現在公務員として勤務している六一名（女子三名を含む）について、昭和二三年二月、配置決定前及び昭和二七年六月の二回にわたり上野式向性検査を実施した。

昭和二三年二月における平均年齢二五・二才で最高三七才最低二〇才で、その約八〇％は大学高専卒業と同時に採用された者で、残り二〇％は転職者である。

その職務内容は一般事務担当である。

結果分析　この二回の検査結果を比較検討して見ると、向性指数の平均は稍外行的な方に偏したことが認られ、両者間の相関は、〇・六五であった。

これを外向、内向の二群に分けて見ると外向性の者はより外向的、内向性の者はより内向的になった傾向が認められるが、極端な変化を示した者はなかった。

これを検査各項目別に見ると、二三年と現在では、平均三七％の一致を見ており、その主な項目は対人的なもの、趣味運動に関するものであった。逆に一致度の極めて低かったものは対物的なもの、対人的なものに現われており、一般的傾向としては、理想主義的なものから現実主義的な方向へ開放的な面から閉鎖抑圧的な方向へと変ったことが認められる。

以上の如く、二三年と現在では、指数上に、又検査各項目に対する性格判断の上に多少の差異は認められる。これは、被験者の殆総てが二三年には学生生活、現在は職場という環境の中に在ると云う点から、検査各項目に対する性格判断の場を著しく異にしていることを考慮しなければならないが、環境の変化によって異なる性格的特徴を示している事実は、考慮して見る必要がある。

保護少年の分類収容について

小　林　卓　郎

P・B級（東京矯正保護管区保護少年分類規定による中等男子で教育比較的困難なもの）からP・A級（教育比較的容易なもの）に切替えられ、昭和二六年七月より約一〇ヵ月を要してその入替えを終った時期に、寮舎が二棟増設され計六棟となり、昭和二七年五月二〇日編成替えを実しした。その後約一ヵ月の経過について述べる。

寮替えにあたっては①新たに学科寮を設け（従来は一週間のスケジュールの中に職業補導と普通学科が併置されていた）考査寮終了後二ヵ月は学科をすることにし、クラスはA・B・Cの三段階とし、その一部に在院中最後まで学科をやるものを三〇名ばかりおくこととした。すなわち、寮は病棟（K）、考査寮（Ⅰ）、学科寮（Ⅱ）、各一、実科寮三にした。②寮父は各寮単独勤務とし、一部寮付職員の配置転換をした。③院内においてP・B級P・A級に分け、実科寮の中一つをP・B級のもの（Ⅲ）、一つをP・A級のもの（Ⅳ）一つをP・A級のうちでも更に性格的に弱いもの、体力的に弱いもの、その他特に個別指導を必要とするものを（Ⅴ）分類収容した。

Kは五月二四日勤務職員の都合上Ⅰに吸収してしまったか合併したためのささいたトラブルが起っている、Ⅰの職員某が五月七日配置替えされたが、この移動は問題を将来にのこしている。

Ⅱは寮の性格がはっきりしており新発足したので生徒、職員共に希望に満ちている。海上警備隊その他の受験希望者がかなり出てきた。一月後には勉強意欲にかなりのひらきができ（但し反目はない）、一部にだれ気味なところもみられるが、一方には自治会が発足して向上をはからんとする空気がでてきた。

Ⅲへの転寮につき一部の不平がある。（Ⅲは従来も院内におけるP・B級の寮であったので）人数がへり場所が変ったので一部の札付きと目されていたものがよくやっている。たまたま職員との言葉のあやから、P・B的な色彩を発揮するような事件が起った。この問題は一応解決したものの、この寮のP・B的な雰囲気を如何にして緩和し、あるいは消滅されるかが問題として残される。

Ⅳは従来の生徒が⅓で残りは混成になったため良い面の維持が困難であるかにみえたが、一部人員の移動によって解決された。

Ⅴは室長が消極的で、しっかりしたリーダーがほしいという声があったが、一部には自治会のうごきが芽ばえてきたと共にⅠよりの某職員の移動はこの寮にとっては幸いしている。他寮に比し寮生の移動（出、入）が順調であることも好結果をもたらしている。実科を通じ他寮よりの圧が多少あるやにも思われるが大した問題はなく Ⅲ・Ⅳ・Ⅴのうちで最も教育しやすい寮である。

各寮室の友人構造の調査結果は次回にゆずる。

複合作業性格検査の六作業曲線型の一致度

板　倉　善　高

〔問題〕　作業性格検査で得られる曲線は第一回目と第二

回目又は第三回目等の曲線と同一であるか否か、即ち一回だけの曲線からその人の作業性格が把握できるかどうか。

この問題は、判定の様式にもよるが、六曲線型の場合では、成人ならば、作為を伴わないならば、ほぼ変化しないようであるが、発育期の青少年では性能が発達しつつあるので、作業量が変化し、同時に曲線型にも変化を及ぼす場合も現れてくる。

今回の試みはこの六曲線型の判定によつて、第一回と第二回との異種簡易連続作業間の一致曲線型の一致度を検討したものである。

〔実験〕

（検査種目）（日時）（場所）（対象）

A 加算作業 26.5～10 東京都新制中学 中学3年男女200名
A 書換作業 27.1～3

B 加算作業 27.3—9.30 東京都某官庁及某会社 新制高校 男60名 女200名
B 複合作業 27.3—10.30 ～10.10 ～11.10

〔結果〕 作業曲線型の一致度（%）

	N	U	D	O	I	S	休後のみの一致合の場
N	$\frac{5}{8}$・63	$\frac{0}{1}$・0		$\frac{2}{3}$・66			$\frac{10}{14}$・71
	[$\frac{2}{2}$・100]	[$\frac{0}{3}$・0]		[$\frac{3}{7}$・43]	[$\frac{2}{5}$・40]	[$\frac{0}{2}$・0]	[$\frac{13}{32}$・41]
U	[$\frac{2}{2}$・100]	[$\frac{0}{1}$・0]		[$\frac{1}{1}$・100]			[$\frac{3}{13}$・23]
D	$\frac{3}{5}$・60	$\frac{1}{3}$・33	$\frac{2}{4}$・50	$\frac{2}{2}$・100	$\frac{5}{10}$・50	$\frac{0}{2}$・0	$\frac{22}{31}$・71
O	$\frac{11}{16}$・69	$\frac{5}{13}$・39	$\frac{1}{3}$・33	$\frac{32}{35}$・91	$\frac{39}{55}$・70	$\frac{3}{6}$・50	$\frac{138}{165}$・84
	[$\frac{5}{5}$・100]	[$\frac{5}{6}$・83]	[$\frac{1}{1}$・100]	[$\frac{28}{35}$・83]	[$\frac{7}{12}$・58]	[$\frac{1}{3}$・33]	[$\frac{71}{90}$・79]
I	$\frac{3}{4}$・75	$\frac{3}{4}$・75	$\frac{0}{2}$・0	$\frac{10}{15}$・67	$\frac{16}{21}$・76	$\frac{0}{1}$・0	$\frac{43}{48}$・92
	[$\frac{3}{3}$・100]		[$\frac{1}{1}$・100]	[$\frac{12}{18}$・67]	[$\frac{15}{23}$・65]	[$\frac{2}{2}$・100]	[$\frac{45}{54}$・84]
S	[$\frac{1}{1}$・100]			[$\frac{0}{1}$・0]	[$\frac{1}{2}$・50]		[$\frac{4}{8}$・50]
休前のみの一致合の場	$\frac{23}{34}$・68	$\frac{11}{39}$・28	$\frac{3}{8}$・33	$\frac{55}{80}$・69	$\frac{78}{88}$・85	$\frac{3}{10}$・30	
	[$\frac{18}{21}$・86]	[$\frac{9}{37}$・24]	[$\frac{2}{2}$・100]	[$\frac{59}{83}$・71]	[$\frac{39}{45}$・86]	[$\frac{4}{10}$・40]	

（休前の型）　（休後の型）

（N＋U）とすれば
[$\frac{25}{37}$・67]

〔結果〕 作業曲線型の一致度（%）

複合作業：加算作業の場合（「 」内は書換作業：加算作業の場合）又分数の分母は出現数、分子は一致数。

〔むすび〕 以上の結果によると、一ヵ年以内で検査時の諸条件が同じならば、曲線型の一致度は、○—○が最も高く八〇～九〇%一致し、以下N—O、N—I、I—I、O—I—Oの順位であり、又休前のみの一致する場合は、INDOの順位、休後のみの一致する場合はIONDの順位に何れも七〇%以上との高率を示し、概ね信頼できるものと言えよう。

なお、もし同一の検査を反復したならば、更に高い一致度が得られるものと思考される。この場合については次の機会に報告する積りである。

（附言） 今回議題となり、恰もこん迷の状態にあるカウンセリングの進路も、上述の六型の表す行動の様式の面から多分に打開できるものと思う。

補遺

第五回　集団性格検出の試み

松村康平
本田周子

(1) 選挙法による集団性格検出の試みである。

(2) a、学校生活における社会的な役割に着目する。b、その役割にふさわしいと思われる友人を挙げる。クラスの人数により連記する人数も異なることであるが、予備実験では、最も適当と思われる人物から、順に、全員の氏名を挙げる。

(3) a、第一番目に選ばれる人数を調べる。b、第二番目に選ばれる人について、第一番目のときに選ばれなかつたものが、幾名いたか。つまり、新人として出現するものの人数を調べる。c、第三番目に選ばれる人につ

いても同じようにして、新人出現数を調べる。

(4) 新人出現状況から、集団のまとまりを検出する。即ち、選出される人数の幅と、出現経過から、主として集団の結合度を検出するのである。

第九回　青年の持つ悩み

——ガイダンスへの一考察——

大平勝馬

一、目的　生理・心理・社会的過渡期にある中・高校生達の行動様式を規定している情緒的社会的コンフリクトの一般傾向を、彼等が持つ悩みを通して探り、ガイダンス上へ一資料を提供したいと考えて本研究を行った。

二、方法　被験者は市、町、農山村別中学校計八校九七八名、郡部及び都市所在高校計四校五二三名。時期は昭和二四年及び二五年。調査は次に示す質問紙により追想的内観を求め、該当項目に○印をつけさせた。

〔調査問題〕

次の五つの問題にそれぞれ五つずつの項目をあげてあります。よく読んで自分にあてはまると思う項目があれば、その項目の番号を○でかこんで下さい。一問題に二つ以上になってもかまいません。

(一) 学習上の問題　一、試験がいつも心配である。
二、友達にまけないかと何時も心配である。
三、勉強しないと言って叱られる。
四、嫌いな学科の勉強をしなければならぬ。
五、成績が下りはせぬかと何時も心配である。

(二) 交友上の問題　一、自分には親友がない。
二、悪い友達と一緒にいる。
三、自分は異性との間がうまくいかない。
四、特別に嫌いな友人がいる。
五、自分は何時も友達に邪魔者にされる。

(三) 家庭生活上の問題　一、家の中に病人がいる。
二、家が忙しくて自分の面倒を見てくれない。
三、家の中が冷い感じがする。
四、家の中で時々ゴタゴタがおこる。

Table 1.

悩み ＼ 学校、学年	中学 1	中学 2	中学 3	中学 計	高学 1	高学 2	高学 3	高学 計
人員	326	359	293	978	179	174	170	523
学習上	33.5	34.8	25.6	31.3	36.4	20.7	27.8	31.2
交友上	16.7	14·6	14.5	15.3	9.7	13.2	12.2	11.8
家庭生活上	13.7	12.9	13.2	13.3	10.4	11.5	10.4	10.7
自分自身	14.7	16.1	19.9	16.8	21.7	23.1	26.7	24.1
将来	21.4	21.6	26.7	23.2	21.8	21.5	22.9	22.1
計	100	100	100	100	100	100	100	100
回答総数	1,969	2,100	1,925	5,994	712	785	979	2,476

Tadle 2.

悩み ＼ 被験者		中学1.2.3年 男	中学1.2.3年 女	中学1.2.3年 計	高学1.2.3年 男	高学1.2.3年 女	高学1.2.3年 計
人員		497	481	978	272	251	523
学習上	試験	8.0	10.2	9.1	7.1	7.7	7.4
	成績の競争	5.7	8.5	7.1	3.7	6.2	4.8
	叱責	5.5	3.8	4.6	4.4	3.4	4.0
	嫌いな学科学習	6.7	4.1	5.4	8.9	7.7	8.4
	成績低下	4.8	5.6	5.2	4.8	9.2	6.7
	計	30.7	32.1	31.4	28.9	34.2	31.3
交友上	親友無	2.3	2.1	2.2	2.9	3.2	3.0
	悪友有	1.1	0.9	1.0	0.8	0.6	0.7
	異性関係不適応	5.9	6.5	6.2	4.8	2.0	3.6
	嫌いな友人有	4.2	4.8	4.5	3.2	4.4	3.7
	孤立	1.3	1.4	1.4	0.6	0.7	0.8
	計	14.7	15.8	15.3	12.6	10.9	11.8
家庭生活上	病人有	1.0	0.9	0.9	1.4	2.0	1 7
	放任されている	2.7	3.7	3.2	1.7	1.8	1.7
	冷淡に扱われる	1.1	0.9	1.0	1.3	1.3	1.3
	家庭内不和	2.0	1.9	2.0	2.7	1.9	2.4
	孤独	7.5	4.8	6.2	4.3	2.9	3.7
	計	14.2	12.3	13.3	11.3	9.9	10.8
自分自身	心配事	4.4	5.6	5.0	5.9	6.8	6.3
	劣等感	1.7	1.4	1.5	5.7	5.4	5.5
	淋しい感	3.4	4.4	3.9	3.1	4.4	3.7
	厭世感	2.5	2.8	2.6	4.2	4.6	4.4
	不安定感	4.1	3.6	3.8	3.7	4.7	4.2
	計	16.1	17.7	16.8	22.6	25.9	24.1
将来	進学障碍	5.9	4.2	5.1	7.2	5.1	6.3
	家庭離脱欲求	4.8	3.9	4.4	6.3	4.0	5.3
	家業従事嫌悪	4.0	4.8	4.4	4.0	2.0	3.1
	希望阻止	2.9	1.9	2.4	1.3	1.4	1.3
	卒業後未定	6.7	7.3	7.0	5.7	6.6	6.1
	計	24.3	22.1	23.2	24.5	19.1	22.1
回答総数		3,016	2,978	5,994	1,392	1,084	2.476

五、家の中が淋しいので遊びに行きたくなる。

㈣ 自分自身の問題　一、心の中に何時も何かしら心配事がある。

二、自分は何かしら友達に劣っているような気がする

三、何故かしら何時も淋しい思いをしている。

四、何故かしら生きていたくないと思うことがある。

五、いらいらして自分自身どの様な心なのか分らない

㈤ 将来の問題　一、上級学校へ行きたいと思うが成績がよくない。

二、卒業したら家におりたくない。

三、卒業したらすぐ家の仕事をしなければならない。

四、自分がしたいと思っていることを家の人が許してくれない。

五、卒業後どうすればよいか迷っている。

三、結果　前掲の調査項目別に学年、性、環境別整理結果を述べ、詳細な解釈や論議を重ねる紙面が許されていないので綜合的な資料の一部を掲げ、御解釈を願うことにする。先ず五つの大きな問題別に中、高校生の持つ悩みを見る時、如何なる割合になっているかを回答総数に対する百分比で示したものが Table 1. である。更にサブ項目にはいって学校、男女別に割合を見たものが Table 2. である。その他性別、環境別、各項目別資料等は割愛する。

以上の結果によっても、中学生高校生が彼等なりに持つ悩みの割合を、一般的に認め得る。特に現在の学習生活及び将来に関するものに多く、交友上・家庭生活上の悩みは、中学生から高校生に向って稍々減少し、これに反して自分自身に関するものは増加していることが、明らかに見られる。これら一般的傾向に基き彼等の個々の生活に即してその持つ悩みを具体的に理解し指導を与えることは、重要なことと考え、敢えて本資料を提出した。

第十回　「善の研究」の心理学的考察

木村　禎司

「善の研究」は明治四十四年の出版で、今から四十年前の著作であるが、今日なお名著として多数の読者を持つことは驚くべきことである。著者はその序文にこの著述が心理主義的なることを認め不満の意をもらしているが、その心理主義の著作がおそらく全著作中で最も読者を期するという事実はどうした事か。それが一つの体系としてまとまっておること、手順頃の分量であること等によるものであろうが、その心理主義的な所が案外生命を持っているのではあるまいか。当時出版された心理学書の多くは今日生命を有しない。善の研究はそれらのなかにあって生命を持っている。その心理学は今日も決して古くさくなっていないという感を与える。著者はその頃ヴント・ジェームズ、ミュンスターバク、スタウトまたはベルグソンを読んだことが、その「寸心日記」や「寸心寸語」に記されている。その根本思想ともいうべき「純粋経験」はヴントやテッチェナの意味と事実とを峻別する考え方と異なり、また当時の元良博士の自全経験と不自全経験の区別とも異る。そのことについては出版当初高橋里美氏の批評があった（思索と体験）最初に統一的な全体的なものがあって、そこから個々の内容が分節して来るという思想は心理学ではその後に発表したものであるが、著者は思考は純粋経験の統一が破れた全体を再び統一しようとするもの、欲求は均衡の破れた全体を再びもとにかえそうとする働きであると規定している。この考えはスタウトにすでに現れている。この主客未分、物我一体という統一的なものから知覚や、反省や欲求が出て来るという考え方はその後のイェンシュの知覚研究やゲシタルト学派の考え方にも共通に見られるものではないかと思う。著者はその後「意識の問題」等でブレンターノやマイノングについて考察しているが、すでにスタウトを読んで居られるとすれば、ブレンターノと結びつきは容易である。

行為の説明はヴントの意志説によっていると思われ、善は行為の価値判断で、簡単に価値論が要約されてあるが、価値は意志の遂行による満足にあるとして活動説をとっている。これはミュンスターバークの満足を価値の本質とする説と共通している。人格は複雑な内容を持つから、それを統一する必要があり、そのためには自己の知を尽し、情を尽して、殆ど自己の意識のなくなった所に真の人格的善が実現されるという。これには禅の影響ももちろん考えられる。しかし意識の底にさらにそれを統一する意識（作用）を考え、それがすなわち純粋経験でもあり、後には無ともいったのではないかと考えるが、こうした超個人的な意識の母胎から意識を考えようとする行き方は現代心理学に共通する所のものを持つ。そこから個人にあっての経験でなく、経験あっての個人であるとの命題も出てくる。

第十回　児童の精神発達と家庭（第四報）

辻　正三
中村　陽吉

我々は第三報の一部に於て表記の題目に対しては副次的問題となるが家庭の保護者の見た児童の行動が性格的特徴と、学校に於て担任教師の見た児童の行動的性格的特徴との関係について簡単な考察を行ったが、本報に於てはその問題を中心的課題として扱う。

対象は東京都港区内の某小学校三年級以上の男女児約二百名であり、調査は保護者に所定の「児童の行動的性格的特徴」についての質問項目に回答せしめたものと、学籍簿に担任教師の記入した児童観との比較で行った。

その結果男女児共に保護者と担任教師の児童観は一致する者の方が反対の者より多くなっている。即ち男児に

於ては反対一に対して一対八の割合となり、女児では反対一に対して一対二の割合となっている。

更にこの結果を男女で比較すると一致率は男児が高く反対率は女児に於て多くなっている。

次にこの結果を保護者の教育程度別に考察するため指標として母の学歴を用いて見ると、男児に於ては母の学歴の低い方が一致率が高く、女児に於ては逆に母の学歴の高い方が一致率が高くなっている。

以上の事からして保護者と担任教師との児童観はある程度ずれがあり、而もそのずれ方は男女児で又保護者の教育程度で各々相違が存する事を知った。

今回の結果によって第三報に於ては単に傾向として教師の児童観と保護者の児童観にずれがあるらしい事のみを云ったに反し、この点を更に量的に而もそのずれの所在をある程度明かにしえたのである。しかし尚問題は多く残っており、教師と保護者と何れがより児童に対して寛大或は峻厳であるか、児童自身の態度に家庭と学校で相違があるか等の問題は上述の結果を規定するものとして更に考察されるべきであろう。

第十回　教職活動に関する実態調査

金井　達蔵

（目的）教員の適不適応の実態を人間としての要求と教師としての要求との葛藤、阻止から考察して、適応者不適応者の要求の差異を明かにすると共に、これを量的に把えた。

（方法）目的及び予備調査の結果に基き質問紙を構成、神奈川県下公私立各種学校教員を母集団として、層化見本法により六五二名を抽出した。

（経過）教師を人間としての教師と教師としての教師として把えることができる。両者は共に身体的、社会的要求をもつことは変りないが、前者はより基本的要求に、後者は二次的要求につらなるものとして理解されようこれらにつらなる外部事情（環境）として、人間としての教師につらなる場を基盤的社会の場とし、教師としての教師に相属する場を公的学校の場、個人的学校の場、図形的社会の場及び家庭の場とに分けることができる。質問紙はそれぞれの場を中心に所在する問題によって構成されている。質問事項は場ごとに六群となる。これら事項の関心の度合については全群を通じて五事項を品等させ、この順位は関心度に換算された。

（結果及び結論）(1)、教職に安定していると称する者は、不安定と称する者より幾分多い。男子は女子よりも安定し、壮年、老年、青年の層の順に不安定の度を増してゆく。

(2)、教師の関心は質的には極めて共通しているが、その量的差異は大きい。職能的要求が高く、生存のための基本的身体的要求は必ずしも上位に現われてこない（教職観の問題であって、必ずしも生活実相ではないかとも思われる）。教師としての要求につらなる公的学校の場の関心が一番高く、人間としての要求につらなる基盤的社会の場の関心は之に次ぐ。

(3)、安定者と不安定者の関心の差異は、生活上の困難、教員としての能力の不足の自覚、子供に対する自己の停滞、国際的、社会的思想の不安混乱などが特筆すべきものであるが、就中、国際的社会的思想の不安混乱と教員としての能力の不足の自覚に基く不安定観についての問題は、今日のわが国の教員の特殊問題と言える。

(4)、一般に教員が切実に当面している問題として、次の問題があげられる。新教育の諸問題、研修時間、教員としての能力の不足の自覚、生活上の困難、国際的社会思想の不安混乱、住宅通勤問題である。

(5)、教育愛、人生観、信仰の確立などの問題についての関心はかなり高いが、切実さに乏しい。尤も信仰の問題は私立学校にあっては当面した問題として取り上げられている。

第十回　催眠後における幻覚発生の一研究

成瀬　悟策

〔目的〕Conditioned sensation を作ることが可能か否かについては実験結果が必ずしも一致せず、したがって賛否両論が対立している。しかし催眠状態では Leuba, C. 人が実験的に成立させて以来まだ否定的結果をみない彼の報告は極く簡単で尓来追試がないので本研究はこれの発生状況を一層詳しく検討してみようとした。

〔方法〕被験者を深催眠（記憶喪失）の状態に導いた後、条件づけ実験と同様、二種類の異る知覚刺戟を五秒間ずつ約五秒間隔で五回呈示する。催眠中の出来事を全部忘れさせた後で覚醒させる。一定時間（一〇分、一日、二日、四日、六日、一〇日）経過後、さきに対呈示した刺戟の一方のみを呈示しながら、被験者の体験を報告させる。

〔被験者〕被験志望中学生（一二―一五才）のうち深催眠に導き得る者のみ、男七名、女一〇名、計一七名。

〔結果要約〕(1)幻痛。一秒間隔でうつメトロノームを被験者の左側においたとき釘先で左手くびを一秒間隔で刺し、右側においたとき同様に右手くびを刺して覚醒させた後、メトロノームを左または右側で拍たせると、痛みを感ずるだけの者、左右方向を誤らぬ者など様々であるが、とにかく全被験者から幻痛が報告され、一〇日後まで続いた者は三名あった。

(2)幻聴。真空管発振器で被験者の左または右側にピー音を聞かせながら左または右の耳下部を棒で圧し、覚醒後左右何れかの側でピー音を鳴らせば左右取違える者、正しい者など区々であるが、とにかく圧迫を報告した者は一〇分後全被験者に、一〇日後でもなお六名あった。

(3)幻視。笛音のときカードに墨書された×を、ブザーのとき⊙のカードを呈示して覚醒させた後、白カードを観察させると笛音のときは×が、ブザーのときは⊙があらわれる。笛とブザーを同時に呈示すると×と⊙が重畳して現われるほか、笛を強くブザーを弱くすればそれに対応して×が薄くて⊙が濃くはつきりと現われる。反対の濃淡関係も与え方によって任意に獲られる。（註）

以上から催眠状態で行われた条件づけ手続きのために、覚醒後、正常状態において幻覚的体験の獲られることがわかった。その幻覚は痛覚にも聴覚、視覚にも同様に現われ、しかも相当期間にわたって永続することが実証された。本報告では一応幻覚と呼んでおいたが、実際にこれが如何なる現象であるかは今後その性質や発生機序を詳細に検訂したうえでなければ、はつきりとはいうことがきない。

〔註〕幻視の項については成瀬悟策小保内虎夫の心像に関する共同報告に詳しく述べた（心理学研究第二三巻第三号、三〇～四四、一九五二参照）。

第十回　学習の転移と態度

塩田　芳久

問題　ゲイツは転移の主要な条件として、(1)経験の一般化。(2)応用に対する積極的態度の二つをあげている。この実験の目的は、原理的知識の指導と応用時における積極的態度の構成が転移（知識を実際場面に適用する）に対して、どのような効果を示すかを明らかにするとともに、この二つの要因の相互作用を知ろうとするところにある。

方法　被験者八八名（中学三年生）を知能によって四つの等価集団に分け、グループ㈠と㈡は錯視に対する原理的知識を、グループ㈢と㈣には事実的知識を数える。一週間後、ミュラーライエル氏錯視図形における錯視の克服を課題として、実際の場面にその知識を適用させてみる。この場合、グループ㈠と㈢には「この前に教えたことが大いに役立つはずだから、思い出してしっかりやりなさい」という意味の教示を与えるが、㈡と㈣には与えない。さらに一週間後、再度同様の仕方で実験を行う。図形はAとBの二種で、Bの方は一そう錯視量が大きい。

第　一　表

図形＼グループ		原理的知識 教示㈠	原理的知識 なし㈡	事実的知識 教示㈢	事実的知識 なし㈣
A図形	1回	2.4	3.2	3.1	3.6
	2回	1.9	3.0	2.6	3.4
B図形	1回	4.1	5.7	5.1	6.1
	2回	3.7	5.7	5.1	6.7

数値は平均値、単位は cm

第　二　表

A図形

要　因	S	f	S/f	F。
1回と2回	0.25	1	0.25	19.2
指導法(A)	0.61	1	0.61	46.92
態　度(B)	1.28	1	1.28	98.30
(A)×(B)	0.04	1	0.04	3.00
S　誤	0.04	4	0.013	—
S	6.995	7		

B図形

要　因	S	f	S/f	F。
1回と2回	0.005	1	0.005	0.06
指導法(A)	1.805	1	1.805	21.23
態　度(B)	4.805	1	4.805	56.53
(A)×(B)	0.125	1	0.125	1.48
S　誤	0.255	3	0.085	—
S	6.995	7		

$F^1_{(30\cdot05)}=10.13$　$F^1_{3(0\cdot01)}=34.12$

結果と考察　一回目と二回目における各グループの平均錯視量は第一表の通りである。各図形における各図の各グループ平均錯視量間の差の有意性を検定によってみるに、グループ㈠はほとんど常に有意な差をもって、他のグループよりもその錯視量は一そう小さい。㈡と㈢の間には常に有意差なく、㈣のそれは多くの場合もつとも大きいといえる。

要因分析の結果は第二表の通りで、いずれの図形においても、態度の影響がもっともけん著であり、指導法の影響も著しいが、両者の相互作用は認められないことがわかる。

以上のような結果からおよそ次のことがいえると思う。

(1)知識を実際の場面に応用するという意味における転移に対しては、事実的知識の教授よりも原理的知識のそれが一そう有利である。

(2)すでに獲得した知識を実際に役立てようとする積極的な態度は転移の効果を高めるために極めて重要な条件である。

(3)以上のような原理的指導と積極的態度の二つの条件の間には、とくに重要な交互関係を認めることはできない。

(4)積極的態度の効果は、原理的指導のそれが一そう困難な事態（B図形の場合においてはそれほど著しいものでないに比較して、依然けん著に認められる。この点に関しては、なおこんごの研究を要する。

第十回　児童における誤音読様相の研究

大平　勝馬

（一）目的　主語教育上児童期における音読の占める位置は大きい。ところが彼等の音読に注目する時案外種々な誤読傾向を示し癖的悪読に発展する傾向さえ見られる。私はこの音読に現れる誤読様相を実験的に分析し原因を探究して言語教育への資料を提供したいと考えた。

Table 1.

学年性		人数	類型 / 要項	反復読数	停滞読数	挿入読数	脱字読数	音声化不能数	誤音声化数	曖昧音読数	倒錯読数	読了時間(秒)
二年	男	57	M	14.33	1.74	0.88	0.71	0.67	2.84	0.20	0.14	82.15
			α	9.75								37.46
	女	55	M	12.43	1.30	0.91	0.43	0.35	1.12	0.14	0.06	63.09
			α	7.85								26.96
	計	112	M	13.40	1.52	09.0	0.56	0.51	2.0	0.17	0.10	72.79
			α	8.80								32.31
三年	男	53	M	10.05	1.16	1.12	0.45	0.45	1.16	0.20	0.10	51.34
			α	6.76								24.64
	女	49	M	12.30	1.16	1.22	0.67	0.48	1.36	0.03	0.12	50.50
			α	6.38								19.65
	計	102	M	11.10	1.16	1.17	0.56	0.46	1.26	0.12	0.11	50.88
			α	6.87								22.25
四年	男	60	M	7.40	0.83	1.36	0.97	0.46	0.89	0.04	0.22	42.71
			α	4.97								16.45
	女	42	M	10.11	0.77	1.12	0.85	0.48	0.64	0.10	0.18	42.40
			α	7.52								19.01
	計	102	M	8.52	0.80	1.26	0.92	0.47	0.79	0.07	0.20	42.58
			α	6.42								17.80
五年	男	62	M	6.14	0.98	1.03	0.89	0.71	1.14	0.22	0.06	41.23
			α	3.73								20.89
	女	47	M	6.76	0.86	0.85	0.51	0.64	1.27	0.02	0.04	36.38
			α	5.41								12.67
	計	109	M	6.42	0.93	0.95	0.72	0.68	1.20	0.13	0.05	39.66
			α	5.31								16.79
六年	男	64	M	8.28	1.57	0.86	0.91	1.36	2.09	0.36	0.11	43.45
			α	5.58								24.34
	女	40	M	9.70	1.22	0.50	0.35	0.98	1.37	0.03	0.10	40.50
			α	6.24								20.34
	計	104	M	8.79	1.45	0.72	0.70	1.21	1.81	0.23	0.11	42.31
			α	6.12								22.27

(二) 方法 被験者は小学二年から六年に至る五二九名。個人別に所定の材料(学年毎に異る)を音読させ、同文を印刷したテスト用紙に予定した記号で凡ての誤読を記録し且つ時間計測を行つた。

(三) 結果 本テスト前百名について予備テストを行い且つ文献的研究の結果、悪読類型を次の様に分類した。即ち、

一、音声化進行過程方面からの分類、(a)反復読(同一部分のくりかえし読み)(b)停滞読(普通の息の断続のために行う停滞以上に長いもの)(c)挿入読(読書材料にない音節の挿入)(d)脱読(音声化せずにぬかす)(e)音声化不能)所謂読めない)(f)誤音声化(文字に対する音声化の誤り)(g)曖昧音読(極めて発音不明瞭で聞きとり難いもの)(h)倒錯読(語を構成している連音或は語を転倒して読む)(i)乱調音読(文意を失う程の変な昇降み、だりな重念又は必要な部分で全然これを欠くもの)(j)走音読(早口な走り読み)(k)隔音読(精神病学上の隔語 Skandieren Sprach 状を呈して一音一音発音してぽつりぽつり読む)

二、音声独自的方面からの分類、(a)吃音読、(b)不明瞭音読(機能的或は器質的に構音障碍をもつもの)(c)鼻音読(鼻音 Nasal Stimme をもって読む)(d)嗄音読(嗄声 Heiserkeit で読むもの)(e)陶音読(所謂舌足らずの如き)(f)低音読(極めて低声で読む)

以上の如くである。本研究においては前著即ち音声化進行過程方面に現れるものを中心とした。量的、質的考察結果の詳細を報告する紙面は許されていないので量的まとめの一部として綜合的な結果を掲げるにとどめる。

Table 1. は、類型別誤音読平均頻数(%)である。これによって全般的な傾向がうかがえるであろう。最も多いのは反復読であり他は割合に少いとはいえ、児童の音読には種々な形態の誤音読が現れていることが分る。これらの一般的傾向を充分認識し、正しい音読指導を通して純正な音声言語を修得させることは口語教育の大切な使命である。

第十回 異性意識の発達に関する研究(第一報告)

鈴木 清
間宮 武

一、対象と調査日時及び方法

昭和二十五年一〇月、神奈川県下の中学、高校、大学生一八〇名について質問紙法(第一段)および面接(第二段)によって調査した。

二、結果

異性意識は幼児より芽生え、漸次いろいろの形態をとって発達してくるが、青年期初期までにみられる異性思慕の体験は一方的なものが多く、これが相互的異性愛に発展するものは非常に少い。すなわち女は一〇九名中一〇名（九・一五％）男三九名中三名（七・六九％）である。

しかし、たとえ相互的異性愛にまで発展しなくても、潜在的にはいろいろの心理的効果をもっている。特定時間の経過後復元的効果（何とか相互的異性愛にまで達しようとするもの）のあるもの女五六名（五六・五％）男一七名（四七・三％）消極的効果（過去の一方的思慕体験に対し憎悪、嫉妬、侮蔑を感じているもの）は女七名（七・一％）男六名（一六・七％）中性効果（全く印象の消失してしまっているもの）は女三六名（三六・四％）男一三名（三六・〇％）となっている。すなわち、残存効果は男女いずれも略々同じくらいある。

しかし女性はこの残存効果のため、その後一定期間別の異性を体験するものは甚だ少いが（三九・五％）男性はかなりある（六三・九％）

つぎに性知識と異性愛体験との間には何らかの関連がある。すなわち、(イ)、早期に性知識を得たのは、然らざるものよりも異性愛を体験するものが多い。(ロ)、またその性知識を友人から得たものに、異性愛を体験するものが多く、これに対し教師、両親などより受けたものには少い。

さらに、性知識を得たときの感情体験の仕方と後の異性愛体験との間にも関係がある。つまり、後に異性愛を体験したものの中には、性知識を興味を以て習得したものが多い。（五一・三％）これに対し、後にも異性愛を体験しないものは、性知識習得に際し嫌悪感や驚愕感を伴ったものの方が多い。（六一・七％）